

ド・パールシム#2

ヴァージニテイ

作・新井孔央(ド・パールシム)

〈登場人物〉

- ・ 上代アカネ…田舎に暮らす女性
- ・ 高倉サキ…アカネのパートナーの女性
- ・ 上代ナノカ…アカネの姉
- ・ 藤田ミオ…アカネの遠い親戚で、田舎への移住を考えアカネの家に居候している。
- ・ 新山カオル…近所に住む新婚の女性

〈舞台設定〉

春の終わり、梅雨。まだ本格的な暑さは訪れていない。

東京から遠く離れた田舎の村。昼間もそうだが、夜はいつそう外の音などは聞かえず、常に静けさに包まれている。

アカネとナノカの姉妹が住んでいる、田舎の家屋の居間。

畳の床。中央にこたつがある。こたつの上にはエアコンのリモコンやティッシュの箱など様々なものが置いてある。

下手の奥には廊下へ繋がる暖簾があり、その廊下は家のさまざまなところに繋がっている。

また舞台上手側の端にもテーブルがある。その上には、本や殺虫剤などが乱雑に置かれている。

舞台奥には低い棚があり、その上にも雑誌や達磨、新聞、飲みかけのペットボトルなどが乱雑に置かれている。

どこか落ち着いた雰囲気もあるが、その一方で重々しさも感じる。

その田舎における3日間の夜を描いた物語。

〈一場〉春の終わりのある日の夜。午後8時半くらい
舞台上には藤田ミオが佇んでいる。

疲れた様子で自分の薬指の指輪を眺めて、ため息を吐く。何かを思い出すように上を見上げた後、それを忘れるように今度は下を向く。携帯を取り出し何かを確認するが、期待していた連絡は来ていないようで、もう一度ため息を吐いて、携帯を投げる。もう一度ため息をついて、携帯を拾う。そして、携帯を操作していると、少しして、泰葉の「Friday Chinatown」の前奏が流れる。

ポケットからタバコとライターを取り出し吸おうとするが、歌詞の部分に入ったので、歌詞を口ずさむ。

最初のサビが終わると、音楽を流したままミオはタバコに火をつけようとする。

奥からアカネが入ってきている。牛乳の入ったマグカップを持っている。

アカネ 「・・・あの」

ミオ 「!？」(恥ずかしくなり急いで曲を止める)

アカネ 「それ、外・・・」(ミオの手に持っているタバコを指さす)

ミオ 「ああ、すみません・・・」

間

アカネ 「・・・え、中国がどうかしたの？」

ミオ 「え？」

アカネ 「え」

ミオ 「は、何がですか・・・？」

間

アカネ (妙に納得して)「・・・あ、旦那さんの出身？」

ミオ 「は」

アカネ 「いや旦那さん、中国の人なんだよね？確か」

ミオ 「あ、いやクォーターですね」

アカネ 「え？」

ミオ 「旦那ってというか婚約者なんですけどまだ。おじいさんが中国の人で」

アカネ 「へえ・・・」

ミオ 「満州出身みたいで。でも彼自身は一回も中国行ったことないみたいだけど」

アカネ 「はあ」

ミオ 「ええ、満州の・・・」

アカネ (軽く遮るように)「でも今、チャイナって」

ミオ 「え？」

アカネ 「チャイナって中国のことでしょう？私、英語はよくわかんないけど」
ミオ 「あ、はい」

アカネ 「韓国はコリアでしょ？そんで、ドイツは英語だとほんとはジャーマニー」
ミオ 「ええ」

アカネ 「ほんとして言い方変だけど・・・でも実際日本だってほんとはジャパなわけ
でしょう？」

ミオ 「はあ・・・」

アカネ 「そうなるってほんとってわかんないよね。英語がほんとなら、アメリカの言っ
てることが全部正しいみたいになっちゃうから（笑）」

ミオ 「はい・・・」

問

アカネ 「・・・でも仕方ないよね・・・私たちは負けたわけだから・・・」

問

アカネ （持っていたマグカップを示して）「これもほんとはミルク・・・ふふ（笑）」
ミオ 「あの、彼、横浜なんですよ」

アカネ 「え？」

ミオ 「出身。東京生まれで横浜育ちなんです。私もなんですけど」

アカネ 「あ、そう」

ミオ 「ええ・・・」

問

アカネ 「・・・本当にこっち住むの？」

ミオ 「え」

アカネ 「東京に比べたらひどいもんでしょう？」

ミオ 「ああ・・・（話を逸らすように）でもいいところじゃないですか。えっとだか
ら、自然とか・・・（付け足すように）森とかあるし（笑）」

アカネ 「まあ旦那さん、来るまでゆっくり考えればいいと思うけど」

ミオ （煮え切らずに）「あ、はい・・・」

問

ミオ 「嫌ですか？だから、私越してくるの」

アカネ （少し悩んで）「そんなことないよ」

ミオ 「そうですか」

アカネ 「どっちでもいい。でも退屈だし・・・（笑）」（アカネはストレッチをします）

問

ミオ （少しためらった後）「・・・あの、中国の人って犬の肉、食べるみたいなんで
すけど、って前テレビで聞いたことあるんですけど」

アカネ 「ああ」
ミオ 「・・・ほんとなんですかね？」
アカネ 「どうだろうね」
ミオ 「それもアメリカの嘘ですかね？」
アカネ 「アメリカだって嘘つきじゃないでしょ(笑)」

舞台奥からナノカが現れる。

ナノカ 「あ、まだ起きてたんだ」
ミオ 「あ、はい」
ナノカ 「アカネも」
アカネ 「私はもう、お風呂入ったら」
ナノカ 「そっか。(ミオに) 寝ないの？」
ミオ 「はい、いやでもまだだって・・・」(スマホの時間を見る)
ナノカ (食い気味に) 「あ、東京はまだ早いかな(笑)」
ミオ 「あ、はい」
ナノカ 「まだ寝ないよね、ネオンとかすごいしね・・・」
ミオ 「ええ」
ナノカ 「いいな、東京・・・(笑)」
アカネ (ナノカに) 「・・・お母さん、寝てるん？」
ナノカ 「・・・もうとっくよ」
アカネ 「そう」
ナノカ 「寝たよ・・・ちゃんと今日も6時くらいに」
ミオ 「え、早い」
アカネ 「どんどん早くなってるのよ、まあ仕方ないんだろうけど」
ナノカ (ミオに) 「・・・お父さんいなくなって、どんどん寝る時間早くなるの」
ミオ 「へえ・・・」
ナノカ (アカネに) 「・・・だから、突っ張り棒はめてきたから」
アカネ 「ありがと」
ミオ 「突っ張り棒？」
ナノカ 「お母さん何しだすかわかんないからさ・・・閉じ込めてるのよ」
ミオ (よくわかっていないが) 「・・・はあ」
アカネ 「まあボケてないだけマシだけ」
ナノカ 「ボケてるみたいなものですよアレは(笑)」
ミオ 「え、お父さんいなくなって、どのくらい経つんですか？」

ナノカ 「んー・・・えっと、半年もまだ」
ミオ 「そうなんですね」

ナノカはテーブルの上のリップを見つけ、それを取る。

ナノカ (ストレッチをしているアカネに) 「・・・清清したん？」
アカネ 「え？」

ナノカ 「清清したんでしょ」

アカネ 「あーいや、まあ(笑)」

ミオ 「え、なんですか？」

ナノカ 「ストーリーキングされてたんよ」

ミオ 「ストーリーキング？」

アカネ 「そんなじゃないよ」

ナノカ 「そうでしょ。あんな変人・・・(ミオに) ウチのポスト、週一でラブレター
(笑)」

ミオ (よくわからず) 「は、え？」

アカネ 「いや、まあ」

ナノカ 「あとは、朝私新聞取りいくんだけど、そんな時いつも電柱の横にいるのよ。その
この斉藤歯科の張り紙の電柱。それで、いつもおはようございまーすって、私
に(笑)」

アカネ 「ただの挨拶でしょ」

ナノカ 「あんた待ってるんよ」

アカネ 「(苦笑)」

ナノカ (ミオに) 「これ立派なストーリーカーよね？」

ミオ 「よくわかんないですけど・・・」

ナノカ (気づいて) 「・・・あ、でもミオちゃん第一発見者か」

ミオ 「あ・・・(理解して) ああ・・・え？」

ナノカ 「その人(アカネを指差して) ストーリーカー(笑)」

ミオ (アカネの方をジッと見る)

アカネ 「・・・え、お姉ちゃん私犯人だと思ってる？」

ナノカ 「そんなじゃないよ」

アカネ 「いやだって、そんな流石に私・・・」

ナノカ (遮るように) 「いや思っただけ(笑)」

アカネ 「そう・・・」

間

ナノカ 「だって嘔みちぎられてたって」

アカネ 「え」

ナノカ (ミオに)「ねえ？」

ミオ 「あ、はい。そんな跡がついてて・・・」

ナノカ 「ね・・・(アカネに) あんたがそんなにするわけないもんね」

アカネ 「え、嘔みちぎられてた？」

ミオ 「はい、喉元。しかもやられたばっかだって警察の人が」

アカネ 「そう・・・」

ナノカ (食い気味に)「やっぱモテてたんかね？」

アカネ 「・・・さあ」

ナノカ 「シュツとしてるもんね、スラーってしてるもん。(ミオに) ねえ？うん、東

京顔ってゆうか。なんかシュツとしてるわ(笑)」

アカネ 「・・・」

ナノカ (ミオに)「東京顔なのにね、恋人作らないでこいつのストーカーしてたの。

変よね(笑)」

ミオ 「はあ・・・」

間

アカネ (意地悪そうに)「・・・検査したんよね？」

ナノカ (少したじろいで)「・・・え？」

アカネ 「自転車あんま乗らない方がいいよ。まあ貸したの私なんだけど(笑)」

ナノカ (急に不機嫌になり)「・・・なに？」

アカネ (嫌味そうに)「いや(笑)」

ナノカ (奥へ去ろうとする)

アカネ 「どこ行くん？」

ナノカ 「・・・自分の部屋」(出ていく)

アカネ少しして、一瞬出て、戻ってくる。

アカネ 「・・・外行ったわ(笑)」

ミオ 「え？」

アカネ 「部屋あっち(出て右)。出居の方向ったもん。アレかね、玄関から出たら音
すると思ったんかね？」

ミオ 「どうゆうことですか？」

アカネ 「だからお姉ちゃん、縁側のところから外行ったんよ」

間

アカネ (訳がわかってないミオを見て) 「不倫してんの」
ミオ 「は？」
アカネ 「不倫してるんよ・多分妊娠してる」
ミオ 「あ、だからさつき検査・・・」
アカネ 「そう」
ミオ 「ああ・・・」(なんとも言えない)
アカネ 「バカよね。そんなん自分から突っ込むとか、バカのことだわ(笑) まあ
退屈なんだろうけど」
ミオ (遮るように) 「あの、噛みちぎられてたのって」
アカネ 「・・・え？」
ミオ 「アレ、やっぱりあの・・・」
アカネ (遮るように) 「東京顔なんでしょ？アレが」
ミオ 「・・・」
アカネ 「全然わかんない、私ずっと田舎だから(笑)」
ミオ 「はあ」
アカネ 「全くかっこいいとか思わんわ」
ミオ 「・・・田舎顔が好きなんですか？」
アカネ 「田舎顔って何よ？」
ミオ 「あ、いや(笑)」
アカネ 「東京顔って、え、なんだ・・・？(笑)」
ミオ 「え、なんでしょう？(笑) ジャニーズ系とかですかね？」
アカネ (遮って) 「私料理できる人しか無理だわ」
ミオ 「は・・・」
アカネ 「できるって言っても、パスタとかじゃダメよ？料理上手い人。あ、ねえ、料理できるの？その婚約者さんは」
ミオ 「いやできないですね」
アカネ 「それじゃダメだわ、うん全然ダメ(笑)」
ミオ 「・・・」
アカネ 「大体ジャニーズってだって、料理とかできんでしょ絶対(笑)」
ミオ (遮るように) 「カニバリズムのアレですか？」
アカネ 「・・・何が？」
ミオ 「死体。やっぱり、食べたってことなんですか？」
アカネ 「・・・」
ミオ 「恋人のこと食べるんですよね？ここの女性って」
アカネ 「・・・まあそうね」

ミオ 「そーゆうやつなんですか？あの死体って」
アカネ (冷たく)「知らないよ、そんなの・・・」(ミオに背を向ける)
ミオ 「や、でも嘔みちぎられてたのって・・・」
アカネ 「うん・・・」(特に意識をせず、太ももを触っている)
ミオ (太腿を見ているアカネを見て)「え、どうかしたんですか？」
アカネ (我に返って)「あ、いや・・・」
ミオ 「え、太もも・・・」
アカネ 「や、なんでも」
ミオ (アカネに近づき、太ももに触れようとする)
アカネ (急に)「触らないで！」(突発的にミオを押す)
ミオ (飛ばされ)「イタ！・・・え？」
アカネ (思ったより力が入っていたので)「あ、いや、でも・・・」

高倉サキが入ってきている。

サキ 「・・・何やってるん？」
アカネ 「あ、サキ」

間

サキ 「え、何今の？」
ミオ 「や・・・」
サキ 「は、突き飛ばしてた・・・？」
アカネ 「あいや、その・・・」
サキ 「・・・喧嘩してたん？」
アカネ 「いや違って・・・」
ミオ (遮るように)「あ、あの、私が悪くて完全に今は。だから、その私がアカネさんの太もも触ろうとしたのがアレで・・・」
サキ (察して)「ああ・・・もも・・・(アカネに) え・・・？」
アカネ (妙に焦って)「あ、いやでも触らせてはないんよ」
サキ 「ああ・・・そう」
アカネ 「ほんとに・・・」
サキ 「うん、いや別に・・・アレだもん、ビックリしたから」
アカネ 「え？」
サキ 「いやだって普段そんな暴力とかしないし絶対アカネ・・・(ミオに) え、しないじゃんね？」
ミオ 「あ、や、私はよくわかりませんが」

サキ 「わかんないって(笑)」
ミオ 「私こっちきたばっかだから・・・」
サキ 「だって女よ？女の子。普通にそんなしなないでしょ(笑)」
ミオ 「まあ」
サキ 「え、何？・・・武闘派な人？」
ミオ 「は、私が・・・？」
サキ 「うん・・・だって東京の人よね？そっちってそーゆーイメージある(笑)」
ミオ 「え？」
アカネ (横から) 「すぐ喧嘩するみたいなの？」
サキ 「そうそう、喧嘩(笑)」
アカネ 「なんかわかるかも」
サキ 「なんか怖いもんね(笑)」
アカネ 「東京はね、怖いから」
サキ 「うんうん」
アカネ 「ね」

アカネとサキは笑い合う。

ミオ (心地悪さを感じ) 「あ、いや私そんな武闘派じゃないです・・・」
サキ 「え？」
ミオ 「喧嘩とか、人生で一回もしたことないです・・・」
サキ 「あ、そう？(笑)」
ミオ 「はい」
アカネ 「でもしなさそうかも」
サキ 「え、どっちよ(笑)」
アカネ 「いや私は普通に東京の人は怖いって言っただけで」
サキ 「だって東京の人じゃん」
アカネ 「東京の人だけどね」
ミオ 「あ、横浜・・・」
2人 「ん？」
ミオ 「出身、横浜です・・・」
サキ (よく分からず) 「うん・・・」
ミオ 「東京じゃないんです私」
サキ 「はあ・・・」

気まずい沈黙

ミオ 「あの・・・初めまして、ですよね・・・？」

サキ 「あ、そうね。話は聞いてたけど」

ミオ 「話？」

サキ 「ええ、アカネの遠い親戚だって。東京の」

ミオ 「あっ・・・(訂正しようとするが止め) はい東京から」

サキ 「どーも、高倉サキ、私」

ミオ 「・・・藤田です・・・」

サキ 「・・・あ、あと第一発見者だって」

ミオ 「え」

サキ 「だって警察に通報したのあなたなんでしょう・・・畑のどこの死体」

ミオ 「ああ・・・まあ、はい」

問

サキ 「・・・でもこっちきてすぐアレとか、ビックリするよね・・・(笑)」

ミオ 「・・・まあ」

サキ 「ね」

ミオ 「・・・あの、結構あることなんですか？ああゆうのって」

サキ 「ああゆうの？」

ミオ 「(言いづらそうに)「・・・だから、その、男性が、その、殺されて、その、噛み

ちぎられてみたいな・・・そうゆうの・・・」

サキ 「んー・・・(アカネに) そんなある？」

アカネ 「・・・ないでしょ」

サキ 「(ミオに)「ないって」

ミオ 「はあ・・・でも、恋人のこと食べるって・・・」

サキ 「そんなの昔の話よ、しょっちゅうあったのは。今はそんな、滅多にないこと

だから」

ミオ 「・・・はあ・・・でも殺人ですよね？逮捕とかってされない(んですか?)」

サキ 「(遮るように)「もちろんされるよ・・・でも、昔からあったことだからね。だ

から、なんとなく認められるところあるし」

ミオ 「・・・そうなんですか・・・」

アカネ 「・・・あのね、そもそもこのあたりって、昔飢饉とかすごくて、それで女が

男の肉を食べるようになったの・・・だって、子供産めるのは女だけでしょう？

セックスして、恋人のことを残せるのは女だけだからって。それだけが今でも

変に残ってるの」

ミオ 「・・・はあ」

サキ 「まあ、だからある意味お祈りみたいなもんよ。それが愛の形ってゆうようになって・・・ほら、だって食べてお腹の中に入れるのと、妊娠するのって、なんか同じようなものでしょう？」

ミオ 「・・・はい・・・」

サキ 「うん、だからそれが愛の表現って」

アカネ 「まあでも、そんなの今じゃ滅多にないし。それに今じゃ、恋人同士がもつれてそーゆうことになることが多いみたいから・・・」

サキ 「うん、だから全然怖がなくてアレだよ、ほんとに」

間

サキ 「アレ、こっちに住むのは確定？」

ミオ 「え、あ、あのパートナーが来ることになってて」

サキ 「パートナー？」

ミオ 「婚約者なんですけど、明後日にこっち来ることになってて。それでちょっと色々見てから決める感じで」

サキ 「そっか。それまでアカネと？」

ミオ 「そうですね。お世話になる感じで」

間

サキ 「・・・じゃあパートナーいるなら、さっきの話ってどう思った？」

ミオ 「さっきの？」

サキ 「好きな人食べるのって」

ミオ 「(なんて答えればいいのか分からず)「ええ・・・」

サキはゆっくりアカネの後ろに回り込み、急に抱きしめる。

ミオ 「!？」

アカネ 「え、は？」

サキ (ミオに)「・・・私ね、結構普通なことだと思っの」

ミオ 「え？」

サキ (アカネに暴力的にキスをする)

アカネ (サキを反射で押し返して)「え、何急に！」

サキ (それには答えずミオに)「だってキスだって普通にすることでしょう？でもそれって相手の唇ちよっとだけ食べてることじゃなか。そしたら、そのまま食いちぎりたいって思ったりしない？」

ミオ 「え、どうゆうことですか？」

サキ 「だから、そのまま唇噛みちぎって、そこから出てくる血とかも全部飲んじゃいたいの。ある意味それと一緒にでしょ。そーやって、好きな人が自分の一部になって、自分の中に残っていくの・・・」

アカネ 「何言ってるの？」

サキ 「・・・私はだって、今だってアカネのこと噛みちぎっちゃいたい」（アカネに軽く迫って）

アカネ （軽く押しつけて）「やめてよ・・・」

サキ （ミオに）「あなただって思うでしょ？そーゆーこと」

ミオ 「え、いや私は・・・え、サキさんはその、あ、えっと・・・」

サキ （アカネに手を触れ）「・・・うん、そうなの」

ミオ 「・・・そうなんですか・・・」

サキ 「・・・あなたも旦那さん、こっち着いたら食べちゃったほうがいいよ。男って案外怖いから。裏切られてひとりになる前にすぐ食べちゃおうの」

ミオ 「・・・は？」

サキ 「そりゃ今は変なことだと思うかもしれないけど。でもここの歴史だから」

ミオ 「歴史・・・」

サキ 「女が男を食べてきたってゆう歴史。女が生きるために男が負けてきたってゆう、女の愛の歴史よ・・・」

ミオ 「・・・」

問

サキ （ミオに近づいて）「・・・あなたレスじゃないんよね？」

ミオ 「え？」

サキ 「セックスしてるん？その人とちゃんと」

アカネ （咎めるように）「ちよっとサキ」

ミオ 「いや・・・まあ普通に」

サキ 「普通って（どうゆうことよ・・・）」

奥から新山カオルが入ってくる。

カオル 「あの・・・」

3人 「!？」

カオル 「・・・あ、どーも・・・ごめんね夜遅くに勝手に・・・一応さつき、玄関でも声かけたんだけど・・・」

アカネ （驚いて）「え、カオルさん・・・？」

カオル 「ええ、ごめんね・・・あの、ウチの来てない？」

アカネ 「ウチの？」

カオル 「・・・ウチの旦那」

サキ 「カズユキさん？」

カオル 「ええ・・・」

間

アカネ 「いや、えっと」(ナノカが出て行ったことは知ってるが、言い出せない。ミオをジッと見る)

カオル 「え？」(視線に気づき、ミオを見る)

ミオ 「え、は？」

アカネ 「あ・・・知らないですけど。なんでウチなんですか？」

カオル 「探してただんだけど、ココ入ってたたんよ」

アカネ 「え!？」

カオル 「あ、いや入ってたのをね、見たってゆう人がいて」

アカネ 「はあ・・・」

間

カオル (ミオに、誰だかわからないが)「どうも」

ミオ 「どうも・・・」

サキ 「あのアレ、東京の」

カオル 「ああ!どうりで見たことないと思った」

ミオ 「・・・」

カオル 「東京な感じだ(笑)」

サキ 「なんですかそれ」

カオル 「雰囲気というか、オーラがしたから東京の」

サキ 「オーラ？」

カオル 「うん」

サキ 「何色？」

カオル 「赤」

サキ 「えー赤？」

カオル 「うん、なんとなく(笑)」

サキ 「まあ、確かにわかるかも」

カオル 「でしょ? なんとなく」

このカオルとサキの会話の途中に、アカネはミオを小さく手招きする。ミオはそれに応じ、アカネに近づこうとするが・・・

サキ (ミオに)「赤っぽいとかよく言われない?」

ミオ (否応なく反応して)「え?いや言われたことないです」

サキ 「そっかー」

アカネ 「え、で、カズユキさんは?」

カオル 「いや、このウチ入ってたって言うから・・・」

間

ミオ (アカネを気にしながらも、突然立って出て行くとする)

アカネ 「え?」

ミオ 「あ、あのお手洗いに」

アカネ 「そう・・・」

カオル (同時に)「あ、じゃあちょっと探してきてくれる?」

ミオ 「え」

カオル 「ウチの旦那」

ミオ (よく分からず)「・・・」

アカネ 「あ、カズユキさん」

ミオ 「・・・はあ」

アカネ 「ここにいるらしいから・・・」(目で何かを訴えている)

ミオ (よくわかっていないが)「ああ、はい・・・」

ミオ出ていく。

カオル 「赤い女がいなくなった・・・」

サキ 「なんですかその呼び方(笑)」

カオル 「・・・処女でしょ。あの子」

サキ 「え、なんで?」

カオル 「オーラ(笑)当たり?」

サキ 「いや、あの子旦那さんいますから」

カオル 「そうなの?・・・でも、ドーセブラジャーもパンツも赤よ絶対」

サキ 「そもそもカオルさんオーラとか見えんでしょ(笑)」

間

アカネ (ナノカが気になり)「え、ほんとにカズユキさんこの家に?」

カオル 「ええ・・・ウチにいないから」

アカネ 「はあ」

カオル 「昨日からずっといなくて。昨日の9時あたりから」

アカネ 「9時・・・9時ってあの死体が見つかったくらいですよね?」

カオル 「死体・・・うん、そうね」
アカネ 「それで？」

カオル (少し悩んで) 「あ、それでここにいるかもしれないから」
アカネ 「誰が見たんですか？」

カオル 「え、あ、んー・・・(笑)」

アカネ 「さっき見たっておっしゃってましたよね？だって」

カオル 「・・・あ、いや、あの見たってゆうのはアレで・・・嘘なんだけど」
アカネ 「え？」

カオル 「あの、だから、それは勘というかアレで」

アカネ 「見たわけじゃないんですか？」

カオル 「ええ、正確には・・・」

アカネ 「じゃあ完全にテキトーってことですか？」

カオル 「テキトーって・・・」

アカネ 「だってそうじゃないですか。別になんか根拠とかそうゆうのがあるってわけじゃないんですよね？」

サキ (遮って) 「え、どうしたの？アカネ」

アカネ 「どうもしてないけど。でもテキトーに来られても・・・」

間

カオル 「・・・今、お姉さんは？」

アカネ 「さっき出てきましたけど」

カオル 「そっか・・・」

アカネ (毅然と) 「ええ」

間

カオル 「そっか、じゃあ」(席を立とうとする)

サキ 「え？」

カオル 「あ・・・えっとじゃあ帰ろうかなって」

アカネ 「え、でも旦那さんここいるかもしれないんですよね？」

カオル 「え、いや・・・」

アカネ (詰めるように) 「じゃあいた方がいいんじゃないですか？」

カオル 「なにそれ・・・」

アカネ 「まあ、少なくともミオちゃん戻るまで・・・」

奥からナノカが入ってくる。

ナノカ 「え・・・カオルさん？」

カオル 「!？」

ナノカ 「なんでウチに？」

カオル 「・・・」

ナノカ (アカネに)「・・・なんでウチに？」

アカネ 「あ、なんか、カオルさんが(旦那さん・・・)」

カオル (遮って)「あ、いやもう帰るところだから」

ナノカ 「え？」

カオル 「もう帰ろうと思ってたから」(出て行こうとする)

ナノカ 「ちよっと待ってください」

カオル 「？」

ナノカ 「カズユキさん知りませんか？」

カオル 「・・・は？」

ナノカ 「だから、カズユキさんどこ行ったか知りませんか？電話もしてるんですけど
出ないから」

カオル 「・・・」

ナノカ 「だから、カオルさんなんか知らないですか？」

間

カオル (苛立ち帰ろうとして)「・・・いや知らないし、私帰るから」

ナノカ (腕を掴んで)「いや知ってるはずですよ」

カオル 「・・・なんで？」

ナノカ 「いや、だって・・・だってあなたの旦那なんだから」

カオル 「じゃあ別にあなたに関係ないよね、カズユキさんがどこにいようと」

ナノカ 「いや・・・でも、カオルさん隠してますよねそれは絶対・・・」

カオル 「え、なに隠す(って・・・)」

サキ (遮って)「え、待ってください!」

2人 「？」

サキ 「やっぱりおかしいですよ・・・今ミオちゃん、カズユキさん探し行ってるん
ですよね?だったら、ここで待ってるのがいいと思うんですけど」

ナノカ 「え!？」

サキ 「だってカズユキさんここいるんだから・・・」

ナノカ 「そうなの!？」

サキ 「ええ・・・え、だってカオルさんがだって」

カオル 「いやだから」

ナノカ 「やっぱり!知ってるんじゃない!」

カオル 「いや・・・」

ナノカ 「そんでここにいるの!？」(少し笑みが溢れる)

カオル 「それは嘘だつてさっき」

ナノカ 「は？」

カオル (腕を振り払って) 「・・・そもそもなんであんたがカズユキ(さんに・・・)」

カオルの言葉を遮るように、ミオが急いで帰ってくる。

ミオ 「いました!!」

他 「!？」

ミオ 「お風呂場お風呂場!誰かいます!」

アカネ 「カズユキさん？」

ミオ 「や、それはわかんないですけど。っていうか私その人知らないんで!」

アカネ 「え、でも」

ミオ 「あ、でも男です!髪短かったんで!」

ナノカ 「え、ほんとにカズ(ユキさん!?)」

カオル (ナノカを押しつけて) 「え、本当!？」

ミオ 「はい!」

カオルは廊下へ走って出ていく。それにミオをついていく。

ナノカ 「ちょっと待ってよ!」(ナノカもそれに続く)

沈黙。アカネとサキだけ取り残される。

サキ 「・・・ほんとにお風呂場にいるんかな・・・？」

アカネ (少し苛立って) 「え？」

サキ 「あ、ごめん。でも、変だったよね、ナノちゃん」

アカネ 「どうでもいいよ(笑)」

サキ 「うん・・・」

アカネ 「どうせなんもないでしょ」

間

サキ 「・・・あのさ、もしだよ?もし、アイツ殺したのが私だったら、アカネはどうする?」

アカネ 「・・・どうゆうこと?」

サキ 「だから、私がアイツを殺した犯人だとしたらどう思うって」

アカネ 「・・・なんでそんなことする必要があるのよ」

サキ 「・・・好きだからだよ・・・へへ（笑）」

アカネ 「え」

サキ 「もしも、あなたのためにあのストーカー、殺したとしたらアカネは嬉しくな
い？」

アカネ 「え、いや嬉しくないってそんなアレだけど・・・」

サキ 「じゃあ殺した・・・」

間

アカネ 「・・・え？」

サキ 「私が、アカネのストーカー殺した」

アカネ 「・・・ほんと？」

サキ 「ほんとよ」

アカネ 「え、えっと・・・」（喉が嘔みちぎられていたことを思い出す）

間

サキ 「引いた？」

アカネ 「え、や、ううん」

サキ 「よかった・・・」（アカネに近づいて、アカネの太ももを触る）

アカネ 「・・・」

サキ 「久しぶりに見せてよ」（アカネのスカートをたくしあげようとする）

アカネ 「ん、や・・・」（曖昧な態度を取る）

サキ 「見せて」

サキはそのままアカネに迫り、スカートの中に手を入れようとする。それを拒むのか拒
まないのか曖昧な態度を取るアカネ。

ナノカが戻ってくる。

ナノカ 「え、何！？（笑）」

2人 「あ・・・」

ナノカ 「ちよつとこない間に何おっげじめてるんよ」

アカネ 「いや・・・（まだ退かないサキに）ちよつと・・・」

サキ 「ああ・・・」（退く）

ナノカ 「ちよつとやめて・・・ただでさえ噂なってるんだから」

アカネ 「え、なにが？」

ナノカ 「アカネちゃんいい人いないのって、みんな言ってるんよ」

アカネ 「・・・」

ナノカ 「・・・あのね、子供作ってなんぼなんだからね女性なんてのは。そーやってみんな、ずっと生きてきたんだからみんな」

アカネ (苛立って) 「・・・動物みたいにポンポン子供作りやいってもんじゃないでしょ。お姉ちゃんみたく」

ナノカ 「何それ」

アカネ 「そもそもお姉ちゃんだって、だってそれは!」

ナノカ (遮って) 「アカネ!」

気まずい沈黙。

サキ (気まずくて) 「・・・え、いたの?カズユキさん」

ナノカ 「ああ、いない」

サキ 「カオルさんたちは?」

ナノカ 「まだ探してるよ、出居の方とか」

サキ 「そう・・・」

問

ナノカ 「・・・私もう一回、あっちの家見てくるわ」

アカネ 「もう一回って。やっぱりさつきカズユキさんのところ行ってたんだ(笑)」

ナノカ 「は?」

アカネ 「報告でもしに行ってたん?」

サキ 「報告?」

アカネ 「そんで会えなくて戻ってきたんだ」

ナノカ 「うるさい、黙って」

問

ナノカ 「・・・悪いんだけどサキちゃん、今日は帰ってくれる?」

アカネ 「は、なんでサキ」

ナノカ 「だってこんな遅くまでここいたら、それこそ噂になっちゃうでしょ?」

アカネ 「別にいいでしょ」

ナノカ 「ダメよ」

アカネ 「なんで?」

ナノカ 「絶対ダメ・・・」

沈黙。

ナノカ 「とりあえず、私行くから」(出ていこうとする)

サキ (ナノカに)「あ、私帰るからその前にいい？」

ナノカ (苛立っているが)「なに？」

サキ 「・・・あのさ、昨日の死体あったでしょ」

ナノカ 「うん、それが？」

サキ 「アレ、私がやったの」

ナノカ 「・・・は？」

サキ 「私がつていうか、私たちが殺しの・・・」

ナノカ (遮って)「え、どうゆうこと？」

サキ 「だから、私とカオルさんで殺したんだよあの人・・・」

2人 「え・・・？」

問

ナノカ 「カオルさん・・・は、えっとそれは」

サキ 「ごめんね、私それだけ伝えきただけだから」(出ていこうとする)

ナノカ 「え、ちょっと」

サキはナノカを無視して出ていく。

ナノカ (アカネに)「・・・ソレ・・・知ってたの？」

アカネ 「・・・ううん」

ナノカ 「サキちゃんとカオルさんが・・・え、なんで？」

アカネ 「・・・知らないよ」

ナノカ 「そう・・・」

問

ナノカ (混乱しているが)「・・・私行くから」

ナノカは頭を悩ませながら出ていく。

取り残されたアカネ。

少しして、ミオとカオルの声が聞こえる。それを聞いて、すぐにアカネは出ていく。

カオル (声)「誰もいなかったじゃない」

ミオ (声)「でも見たんですもん」

カオル (声)「ほんとに？」

ミオ (声)「ほんとですよ絶対」

カオル (声)「でもどこもないし・・・」

二人が入ってくる。

カオル 「アレ、誰もいない」

ミオ 「どこ行ったんですかね」

カオル 「・・・なんか、疲れたわ」

ミオ 「ですね・・・」(その場に座り込む)

問

ミオ (気まずそうに) 「・・・な、なんでこの家にいるんですかね？」

カオル (はぐらかすように) 「さあ」

ミオ 「・・・」

カオル 「さあね、わかんないよ」

ミオ 「・・・でも、新婚なんですよね？」

問

カオル 「・・・ねえ、腕まくってみてよ」

ミオ 「え？」

カオル 「腕まくり、してみてください」

ミオ (渋々腕まくりをして) 「こうですか？」

カオルはミオの腕を凝視するように近づく。

カオル 「・・・ハンコ注射だ(笑)」

ミオ 「やだ恥ずかしい」(袖を戻そうとする)

カオル 「いいから」(戻そうとするのを止める)

問

カオル 「かわいい・・・」

カオルは少しの間ミオの腕を凝視した後、突然ミオの腕を舐める。

ミオ (反射で飛ぶように後退りし) 「え、なんですか!？」

カオル 「・・・あんた処女でしょ」

ミオ (ひどく動揺し) 「・・・はい？」

問

カオル 「・・・あんたのどこも上手くいつてないんだ(笑)」

ミオ 「いや・・・」

カオル 「・・・なんでこんな田舎に来たん？」

ミオ 「・・・」

カオルはミオにもう一度迫る。

ミオ (突き飛ばして)「やめてください!」

カオル (ニヤニヤしている)

ミオ 「あの、そんな上手くないってないとか全然アレで・・・」

カオル 「・・・そう(笑)」

音楽が鳴って、暗転。

〈2場〉

翌日。夕方。舞台上にはカオルとサキがいる。

また、舞台の端には地面に突っ伏して倒れているカオルがいる。

ナノカは外から入ってきて、

サキ (ナノカに)「・・・まだ外、雨降ってた?」

ナノカ 「うん、土砂降り」(奥に置いてあったタオルで足などを拭く)

サキ 「そっか・・・」

間

サキ 「・・・どうすんの、コレ・・・?」

ナノカ 「寝てるん?」

サキ 「多分・・・」

ナノカ 「水持ってくるわ」(出ていこうとする)

サキ 「もうやめときなって」

ナノカ (足を止めて)「・・・」

突然ナノカはカオルのところに行き、カオルを思いつき蹴り飛ばす。

カオル (うめき声をあげる)

ナノカ 「なに寝てるんですかー?」

カオル (荒い呼吸をしている)

ナノカ (サキに)「ねえ、私いない間なんもしてないよね?」

サキ 「うん、何も」

ナノカ 「コイツ、昨日の今日で普通に仕事してたからね。駅前のお土産屋」

サキ 「はあ・・・」

ナノカ 「旦那いなくなったのに探してもしないの(笑)」

間

ナノカ 「起きろって！」(もう一度カオルを蹴り飛ばす)

カオル (うめき声をあげ、顔をあげる)

ナノカ 「ほんとに・・・ほんとどこに隠してるんですか？」

カオル (何かを言うが声になってない)

ナノカ 「なんですか？」

カオル (弱々しく)「知らないって」

ナノカ 「知らないわけじゃないでしょ！」(カオルの胸ぐらを掴もうとする)

サキ (それを止めて)「やめなっぺ！」

サキがナノカを止めようとして、勢い余ってナノカを倒してしまふ。

ナノカ 「・・・いった・・・」(少し、お腹を気にする)

サキ 「あ、ごめん、大丈夫？」

ナノカ 「・・・」

サキ (押さえてるお腹に気づき)「え、打った？」(お腹をさすろうとする)

ナノカ (その手を払う)

カオル (弱々しいがハッキリと)「・・・あの子は？」

ナノカ 「・・・は？」

カオル 「あの子、東京の・・・」

ナノカ (苛立ちながら)「ああ上。あの子朝から気持ち悪いって言ってずっと寝てますから」

カオル 「体調悪いの？」

ナノカ 「・・・知りませんよ、そんなの」

カオル 「そう・・・」

間

サキ (急に何かを思い立ち)「・・・つわりかも・・・」

ナノカ 「え？」

サキ 「いやミオちゃん。ずっと気持ち悪いってそうゆうのかなって。だってつわりってそーゆー感じになるでしょ？」

ナノカ 「ああ。まあ知ら(ないけど・・・)」

カオル (遮るように)「そんなことないでしょ。あの子処女よ・・・」

サキ 「またそんなこと・・・(笑)」

カオル 「でも・・・！」
ナノカ 「自分の旦那いなくなってまだそんなこと気にしてるんですか!？」
カオル 「・・・」

沈黙。

サキ (この場から離れるように)「ちよっと私様子見てくるよ」

ナノカ 「ん？」

サキ 「ミオちゃんの」

ナノカ 「いいよ、寝てるから」

サキ 「でももし一人で苦しんでたりしたら大変じゃない？」

ナノカ 「え？」

サキ 「だから自分でトイレ行けなくて部屋の中で吐いちゃったりとかしたら・・・」
(二人を気にしながら、部屋を出ていこうとする)

カオル (急に強い口調で)「・・・大体、なんであなたがカズユキさんをそんなに詮索する必要があるのよ・・・それはおかしいでしょ絶対」

ナノカ 「え、なんですか？」

サキ (出ていく足を止める)

カオル 「・・・じゃあこの際だから言うけど、私ずっと前から知ってたんだから。あんたがカズユキさんと何回も何回も、会ってるの」

サキ 「は？」

カオル (サキに)「ええそうよ!ずっと前からこの人はね不倫してるの不倫。カズユキさんとずっと!」

サキ (ナノカに)「え、そうなんですか!？」

ナノカ 「・・・」

カオル 「それだから、あの人のことずっと探してるのよ!」

間

サキ 「・・・え、じゃあだから・・・」

カオル 「ん？」

サキ 「・・・や、いや、あのずっと言い出せなかったんですけど・・・っていうかなノちゃんすぐ暴力し始めるからタイミング逃しちゃったんですけど・・・あの、私今日カズユキさんみたいな人見たんですよ・・・」

2人 「は!？」

サキ 「はい、今日・・・」

ナノカ 「え、なんでそれをすぐ(言わないの・・・!)」

カオル (遮るように)「え、どこで・・・!?」

サキ 「納屋あるでしょ?縁側ずつと行ったほうにある。その前で突っ立ってる感じで・・・」

ナノカ (遮って)「え、納屋!?!」

サキ 「はい、その前あたり・・・え、え、昨日もアレだし、今日も、え、それってナノちゃんに会いに通って(来てたってこと?)」

ナノカ (遮って)「え、それほんと?」

サキ 「うん、多分見間違えじゃないと思うけど・・・」

ナノカ 「なんで・・・!」

ナノカは急いで廊下に出ていこうとするが、それを押しつけるようにカオルが出ておこるとナノカを突き飛ばす。ナノカは突き飛ばされながらもカオルの手を掴む。カオルはそれで体制を崩す。

ナノカ 「ダメです!」

カオル 「は、なに!?!」

ナノカ 「いや私が行きます!」

カオル 「なんでよ!」

ナノカ 「だって私の家ですから!」

カオル 「私の旦那だから!」

ナノカ 「え・・・それ言います!?!」

カオル 「は?」

ナノカ 「じゃあ私言いますよ・・・?」

カオル 「何を!?!」

ナノカ 「私言いますからね?カオルさんが不倫してること!」

問

カオル 「・・・は?どうゆうこと?」

ナノカ 「知ってますから・・・こないだの見つかった死体、犯人カオルさんだって」

サキ (咎めて)「ナノちゃん!」

カオル 「・・・は、なんで・・・」(サキを睨む)

サキ 「いや・・・」

カオル (サキに掴みかかろうとして)「ちょっとサキちゃん!」

ナノカ 「違う。別に犯人が誰とか全くどうでもいいんです。そうじゃなくてあの死体、喉が噛みちぎられてたんでしょ?」

カオル (本当に訳がわからず)「・・・え?」

ナノカ 「嘸みちぎられてたつてことは、あの人と、そうゆうことだったんじゃないんですか・・・?」

カオル 「嘸みちぎ(られてた・・・)私それ(知らない・・・!)」

ミオが入ってくる。

ミオ 「あの・・・すみません」

他 「!？」

ミオ 「え、どうゆう状況ですか・・・？」

ナノカ 「どうしたの？」

ミオ 「あ、いや、あのお母さん、起こしちゃったかもしれない」

ナノカ 「どうゆうこと？」

ミオ 「いや私ずっと気持ち悪くて、こんなことアレなんですけど、何回かえづいちやって。それで少ししたら壁ドンドンって叩かれて・・・」

ナノカ 「ああ」

サキ 「隣の部屋なの？」

ナノカ 「隣っていうかミオちゃんくるから、お母さんのおつきい部屋、襖で区切ってるだけなんだけど・・・」

ミオ 「私すみませんすみませんって何回も謝ったんですけど、でも気持ち悪いの止まらなくて、何回かえづいちったりして・・・そしたら襖がさ、ちよつと空いて・・・」(半泣きしている)

ナノカ 「え？」

ミオ 「こつち覗いてきたんです・・・」

カオル 「それって起こしてるよね？」

ミオ 「ん？」

カオル 「起こしちゃったかもじゃなくて、起こしてるよね(笑)」

ナノカ 「いやいいですからそれは今」

カオル 「いや・・・」

ナノカ 「それで？」

ミオ 「あの、それで顔だけだして、『あなた妊娠してるの?』って」

ナノカ 「は」

ミオ 「それでまた襖閉まっちゃって。でもその前にコレ渡されて・・・」

ミオは後ろ手に隠していたピンク色のデイルドバイブレーターを見せる。ミオは少しだけ泣いている。皆はそれを凝視する。

サキ (我慢できずに大笑いする)

他 (サキの方に視線を向ける)

サキ 「あ、すみません(笑) いやでもデイルドって(笑)」

ナノカ (ミオに) 「それ貸して」

ミオ 「あ、はい」(デイルドをナノカに手渡す)

ナノカ 「ちょっと行ってくるわ」(出ていこうとする)

サキ 「え、ちょっと見せてよそれ」

ナノカ 「え？」

サキ 「私そうゆうの初めて見たし」

ナノカ 「はあ・・・」(渋々サキに手渡す)

サキ 「ありがとう(笑)」

ナノカ 「じゃあちよっと」(出ていく)

問

サキ (マジマジとデイルドを見ながら) 「すご・・・(笑)」

沈黙。サキは電源を見つけ、電源を入れる。ブーブーという音が部屋に響く。こっからの会話は、常に全員がデイルドを気にしながら行われる。

カオル (少しして、サキに) 「・・・納屋って奥にあるボロ屋みたいなことよね・・・？」

サキ 「そうですよ」

カオル 「そう、え、なんで・・・？」

ミオ 「どうかしたんですか？」

カオル 「いや・・・カズユキさんがいるって」

ミオ 「え、またですか？」

サキ 「いや見たの、今日」

ミオ 「はあ・・・」

カオル 「・・・あなた第一発見者よね？」

ミオ 「え？」

カオル 「一昨日の死体。ミオちゃんが見つけた時嘔みちぎられてた？」

ミオ 「あ・・・はい」

カオル 「そう・・・」(サキの方を見る)

サキ (カオルから目を逸らすようにデイルドに視線を移す)

問

サキ 「・・・なんでこんなの持ってんだろ、お母さん(笑)」

カオル 「え？ああ・・寂しかったんでしょ？」
サキ 「寂しい？」

カオル 「旦那さん失踪して、もうそこそこ経つでしょ？寂しかったんだよきっと」
サキ 「そうゆうもんか・・」

ミオ 「なんかこうゆう神様いますよね？」
サキ 「え？」

ミオ 「いや、なんか結構あるんですよ全国に。なんのためかわかんないですけど。でも子孫繁栄とかそうゆうのじゃないですかね？」

サキ 「へえ」
ミオ 「安産祈願とか。こうゆう形の石像置いてあるらしくて」

サキ 「でもそれって変よね？」
ミオ 「変ですか？」

サキ 「だって、子供産むのって女性のすることでしょう？チンコに祈ってもなんかしてくれる訳じゃないでしょ」

ミオ 「まあ」
サキ 「そうゆう意味では男って怖いよね(笑)」

問

カオル 「うるさいな・・(笑)」
サキ 「(笑)」

カオル (デイルドの電源を切る)
問

サキ (何を思ったのか) 「・・でもとりあえず祈っとくか、神様なら」
ミオ 「え？」

サキ 「安産祈願・・(笑)」

サキはミオを促して二礼二拍手一礼をして祈る。ミオはつられてサキの真似をする。カオルはそれを奇妙な目で見つつも、部屋の外へ出ていこうとする。それと時を同じくしてアカネが入ってくる。喪服姿だ。

カオル 「!？」

アカネ (少し怪訝そうに) 「あ、カオルさん。来てたんですか？」
ミオとサキ (驚いて祈るのをやめる)

アカネ 「その辺、タオルなかったですか？」
カオル 「あ、いやわかんないけど」

アカネ 「そうですか」

アカネは出ていく。サキはデイルドを部屋の端のテーブルの上に移動させる。

ミオ 「結構早かったですね」

サキ 「お焼香だけでしょ、こんなもんじゃない？」

ミオ 「私そうゆうのなくて今まで」

サキ 「そうなんだ」

アカネがタオルで足を拭きながら戻ってくる。

サキ 「あ、おかえり」

アカネ 「うん。もうね、靴がビチョビチョ（笑）」

サキ 「服は？」

アカネ 「上着はビッチョリよ、もう最悪」

サキ 「そっか」

アカネ 「うん。(ミオに) ミオちゃんも起きたのね。低気圧？」

ミオ 「え」

アカネ 「あ、寝込んでたから。低気圧ダメな人？」

ミオ 「や、まあダメな方ではあると思います普通」

アカネ 「何それ（笑）」

ミオ 「いや（笑）」

アカネ 「私結構ダメな人。あ、ロキソニンいる？今更だけど」

ミオ 「あ、大丈夫です」

サキ 「まだ（雨は）ひどい？」

アカネ 「ひどいなんてもんじゃないよ。(何の気なしに自分の手の匂いを嗅いで) う

わ、まだお焼香臭い（笑）」

サキ 「洗いなよ（笑）」

アカネ 「ちゃんと洗ったよ、雨で」

サキ 「雨かい（笑）」

アカネ 「タイミンクなかったもん」

ミオ 「え、嗅いでいいですか？」

アカネ 「・・・は？」

ミオ 「私、そうゆうの出たことなく・・・」

アカネ 「ああ・・・」

ミオ 「え、ダメですか？」

アカネ 「まあいいけど」(渋々手の匂いを嗅がせる)
ミオ (嗅いで少し考えて)「・・・なんていうか、すごい・・・なんかいいですね。」
アカネ 「いい？」
ミオ 「あ、いや人死んでるのにこーゆーの変だって、わかってますけど・・・でも私この匂い好きかもしれないです。落ち着いてる感じで、いい匂いで・・・え、だって人が死んだって感じしなくないですか。まだその人がそばにいる感じっていうか、なんかだってこの匂いって・・・」

カオルはこの辺りで出ていこうとする。アカネはそれに気づき、

アカネ 「え、カオルさん、なんで今日もまたいるんですか？」
カオル 「え？」
アカネ 「いや、なんで今日もいるのかって、だから聞いているんですけど」
カオル 「・・・」
アカネ 「アレですか？またカズユキさんが出ましたんですか？ウチに」
カオル 「・・・」
アカネ (サキに)「え、なんで？」
サキ 「や、えっと・・・」(言いたいけど言えない)
アカネ 「普通に意味わかんないんだけど」
カオル 「・・・連れてこられたのよ」
アカネ 「は？」
カオル 「あんたの姉に連れてこられたのよ、無理矢理・・・」
アカネ 「はあ・・・」

問

アカネ (カオルの目の前に立って)「・・・あの、口見せてくれます？」
カオル 「ん？」
アカネ 「口、アーンってしてもらえます？」
カオル 「え、なんで？」
アカネ (少し興奮気味で)「え、アーンするのに理由とかありますか？」
カオル 「そうじゃなくて」
アカネ 「ただ口アーンして見せてって言うてるんですけど！」
カオル 「なんで!？」

アカネはカオルの顔を掴み、無理矢理口を開こうとする。それに抵抗してカオルはアカネを突き飛ばす。アカネはカオルの足を掴む。

アカネ 「口を見せろ！歯を見せろ！」

カオル 「なに！？」

アカネ 「歯！歯を見せればいいだけなんで！」

カオル 「だからなんでだって！離せ・・・！」

サキ (アカネを止めに入って) 「ちよつとアカネ！」

ミオ 「アカネさん！？」

アカネ 「歯を見せろって・・・！」

サキが必死に止めることで、アカネはカオルから手を離す。カオルは逃げるように出て行こうとするが、アカネは彼女の手を掴む。カオルはその手を振り払う。

カオル 「・・・え、何！？バカじゃないの！？」

アカネ 「・・・」

カオル 「姉妹揃ってキチガイかよ、あんたら・・・！」

カオルは逃げるように部屋を出て行く。

サキ 「・・・え、どうしたの？」

アカネ 「・・・」

サキ 「アカネ・・・？」

アカネ 「・・・私聞いたんだよね」

サキ 「ん？」

アカネ 「・・・葬式でき、みんなジロジロ私のこと見てくるのよ。多分犯人だと思われてるんだよ私。ストーカーされてたのみんな知ってるから・・・それで帰ろうとしたらさ、警察の人みたいな人に呼び止められて、口の中見せてくださいって・・・」

サキ 「うん・・・」

アカネ (少し泣いている) 「私ちゃんと口開けたんだよ？男だったのに・・・みんなに見られながら、ちゃんと歯見せて。なのにカオルさん全然歯見せないし・・・」

サキ 「え、なんで歯？」

アカネ 「アイツについてた歯形、犬歯が少し人より尖ってるからって・・・」

サキ 「犬歯・・・」

アカネ 「うん、なんか・・・」

沈黙。

サキ 「・・・そっか、そんなことがあったんだね」

アカネ 「うん・・・」

サキ 「・・・」

アカネ 「私、手洗ってくる・・・」(立とうとする)

ミオ 「あ、ちょっと」

アカネ 「なに？」

ミオ 「もう一回手借りてもいいですか？」

アカネ 「？」

ミオ (アカネの片手を勝手に取り、匂いを嗅ぐ)

アカネ 「ちょっと」(反射で手を引っ込める)

ミオ 「やっぱり好きだコレ・・・」

2人 「・・・」

ミオ 「あ、でもアレですかね、噛みちぎられてたつてことは相手の中に残り続けているってことなんですよね？そーゆーことだとしたら、死んだって感じしなくていいのか・・・」

アカネ 「え・・・？」

ミオ 「ねえ？じゃあ感じしなくていいんだ・・・」

問

サキ 「ミオちゃん、そうゆうの感じるの？」

ミオ 「や、別にアレですけど・・・でもわかる気がします・・・」

問

アカネ (出て行こうとするがふと思いつき、サキに)「・・・え、サキのも見せてよ」

サキ 「え？」

アカネ 「いやだから歯」

サキ 「・・・なんで？」

アカネ 「なんでとかじゃなくて」

サキ 「え、何？アカネ私疑ってるの？」

アカネ 「でもだって・・・(ミオの方を少し見てから)・・・でもだってさ・・・」

サキ 「え、でもそんな尖ってないよ私」

アカネ 「でもなんもないなら見せられるでしょ？」

サキ 「アカネ見たことあるでしょ？」

アカネ 「え」

サキ 「私の歯」

アカネ 「ないよ」

サキ 「え？」

アカネ 「ないでしょ普通、(ミオに) 見ないよね？恋人の歯」

ミオ 「あ、え、どうなんでしょう・・・？」

アカネ (サキに) 「私見ない！」

サキ 「は！？」

アカネ (迫って) 「いいから見せて！」

サキ 「ヤダ！」

アカネ 「なんでよ！」(サキに迫る)

サキ 「ちよっと！」(アカネを押し返し、端のテーブルの方まで引く)

アカネ (再度迫る) 「ねえ、いいでしょ！」

サキ 「ヤダ！変だよアカネ」

アカネ (サキの口を開けようとして) 「変じゃない！ねえ見せて」

サキ 「やめて！」

アカネ 「ねえ！」

アカネがサキの口を開けようとし、サキがそれに抵抗する攻防。ミオはそれをどうすることもできず、ドギマギしながら見ている。ふとサキは近くにあったデイルドを構える。

サキ 「いい加減にしないとぶつよ！」

アカネ 「は！？」

サキ 「私ぶつから！」

アカネ 「何それ！」

サキ 「なんもないって言ってるでしょ！」

アカネ 「だから何なのそれ！？」(と言いながら、テーブルの上のエアコンのリモコンを手に取り構える)

サキ 「そんなことどうでもいい！」

アカネ 「でも・・・！」

二人がデイルドとリモコンを構えて侍のような構えで沈黙する。少ししてナノカが入ってくる。

ナノカ (状況をうまく飲み込めず) 「え、クロサワ・・・？」

3人 「！？」

ナノカ 「あ、や、クロサワ映画・・・(笑)」

サキ (デイルドを置いて出て行くこうとする)

アカネ 「ねえ、待って！」

サキ (無視して出て行く)

沈黙。

ナノカ 「え、カオルさんは？」

ミオ 「あ、さつき・・・」

ナノカ 「は、逃げた!？」

ミオ 「逃げたっていうか・・・」(アカネの方を見る)

アカネ (視線を感じ、リモコンを置き、部屋の隅にへたりこむ)

問

ナノカ 「え、どうしたの？」

ミオ (同時に)「え、お母さんは？」

問

ナノカ 「あ、いいよ何？」

ミオ 「すみません。えっと、お母さん、大丈夫でした？」

ナノカ 「ああ、大丈夫よ、気にしないで」

ミオ 「はあ・・・」

ナノカ 「でも、もうなんか言われても知らんぷりでいいから」

ミオ 「え?」

ナノカ 「いいの別に、あの人ずっとそうだから」

ミオ 「そうなんですか」

ナノカ 「うん、頭おかしいのよ。もうキチガイだから」

問

ミオ 「・・・あの、私嘘ついてたことあって」

ナノカ 「ん?」

ミオ 「嘘っていうかアレなんですけど・・・あのさつき帰って来た時、私お母さんが

『あなた妊娠してるの?』って聞いてきたって言ったんですけど」

ナノカ 「うん」

ミオ 「ほんとはそうじゃなくて、あのえっと・・・あなたも妊娠してるのって」

ナノカ (違いがわからず)「ん、え?」

ミオ 「だから『あなたも』って。『も』って、『あなたも』って言ったんですよ」

ナノカ (理解し)「ああ・・・」

ミオ 「・・・お母さん、妊娠してらっしゃるんですか・・・?」

ナノカ 「・・・いや違うよ・・・」

ミオ 「・・・」

ナノカ 「っっていうかやめて。そんなことミオちゃんが気にすることじゃないし」

ミオ 「・・・はい」

ナノカ 「だからキチガイなんよ・・・」

間

ナノカ 「あ、それでカオルさんは？」

ミオ 「あの、えっと・・・」(アカネの方を見る)

アカネ 「出てったよ」

ナノカ 「は、逃したの!？」

アカネ 「なに逃したって」

ナノカ 「だって、私アイツの職場まで行って捕まえて来たのに」

アカネ 「なに?動物じゃないんだから」

ナノカ 「動物よ!旦那がいなくなって自分で探もしないんだから!・・・きつとあの
人いなくても他行けばいいとか思ってるの!取っ替え引っ替え、ある意味動物
でしょ!」

アカネ (嫌味に)「お姉ちゃんそんな興奮しない方がいいと思うよ」

ナノカ 「え?」

アカネ 「お腹に響くよ?」

ナノカ 「アカネ!」

沈黙。

ナノカ (思い出して)「あ、そうだ。納屋だ・・・」

ナノカが出て行こうとすると、血相を変えたカオルが入ってくる。

カオル 「何アレ!？」

ナノカ 「あ、カオルさん!？」

カオル 「何よアレ!」

ナノカ 「アレ?」

カオル 「納屋!」

ナノカ 「は!？」

カオル 「納屋の中!なんかバリケード、ダンボールとかさ!ダンボール積み上がって
て、その向こう側!」

ナノカ 「・・・」

カオル 「なんか変な匂いするからさ。モワァってなんか腐ったみたいな、気持ち悪い匂いするからさ・・・それで電気つけたんだけど」

ナノカ 「電気つけたんですか!？」

カオル 「うん・・・そしたらさ、そしたら・・・」

ミオ 「え、なんかあったんですか?」

カオル 「血の跡が・・・」

ミオ 「血!？」

カオル 「うん、血が床にべチャァってなってて」

ミオは何を思ったのか咄嗟に部屋から出て、確認しに行こうとする。

ナノカ 「待ちなさい!」

ミオ 「え、でも!」

ナノカ 「いいから待って!行っちゃダメ!」

ミオ (渋々行くのをやめる)

間

ナノカ 「なんも知りませんから私」

カオル 「は?」

ナノカ (急に激昂して) 「知らないから!そんな血とか言われても私なんも知らないからほんとに!」

間

カオル 「アカネちゃんは?」

アカネ 「・・・」

カオル 「自分の家のことでしょ?何か知らないの?」

アカネ (そっぽを向いて) 「・・・」

ミオ (恐る恐る) 「・・・あのー、旦那さんじゃないですかね?」

ナノカとカオル 「!？」

ミオ 「え、だってそうじゃないですか?考えたら。だって、旦那さん納屋にいたんですよね?え、旦那さん発見できたんですか?」

カオル 「できてないけど・・・」

ミオ 「・・・そしたらさ、え、こんなこと言っちゃアレですけど、旦那さんがその血の・・・」

カオル (遮って) 「やめて!言わないで!」

ミオ 「でも・・・え、その血乾いてました?」

カオル 「・・・いや、そこまで確認してない・・・」
ミオ (ナノカをじつと見る)

ナノカ 「え、何？」

ミオ 「いや・・・でもそうゆう歴史なんじゃないですか？この田舎ってそうゆう歴史があるんじゃないですかだって・・・」

ナノカ 「・・・は？」

カオル (ナノカを睨んで)「お前・・・」(確認しに出て行くこととする)

ナノカ 「私が行きますから！」(カオルを押し除ける)

カオル 「でも！」

ナノカ 「私が戻るまで誰もこっから出ないでください！いいですね！」

ナノカは出て行く。沈黙。

カオル (つぶやくように、少し泣いている)「やっぱキチガイだ・・・」

問

ミオ (カオルに)「・・・すみませんなんか、言っちゃって」

カオル (へたりこんで)「・・・いいんだけど、私も少し思ってたことだし・・・(急に八つ当たりのように大きな声を出して)あー私どうすればいいんだろ！ほんとどうすればいいの！？旦那死んでたらさ、私葬式とかしたことないよー！」

ミオ 「・・・」

カオル 「・・・ねえなんか言っちゃってよ！」

ミオ (アカネに近づき)「なんか言ってくださいよ」

アカネ 「・・・私？」

ミオ 「・・・あ、だって今日お葬式行ってきたんでしよう？え、今日のどんな感じだった(んですか・・・?)」

アカネ (遮って)「え、そこじゃないでしょ」

ミオ 「？」

アカネ 「絶対今そこじゃないと思うけどな私・・・(苦笑)」

問

カオル (ふと、舞台端のテーブルの上のデイルドを手に持つ)「・・・」

アカネ 「・・・それなんなんですか？」

カオル 「ミオちゃんももらって来たの」

アカネ 「誰に？」

カオル 「アカネちゃんのお母さんよ」

ミオ (同時に)「お母さん・・・」

アカネ 「は、お母さん？」

ミオ 「ええ」

アカネ 「え、なんで・・・？」

ミオ (答えようがなく) 「・・・」

カオル 「・・・私もこーゆーの買った方がいいのかなあ・・・？」

カオルがデイルドの電源を付ける。ブーという音が響く。

カオル (デイルドを凝視しながら) 「いいよね絶対・・・」

アカネ 「音デカくないですか？」

カオル 「うるさいよね(笑)」(電源を消す)

問

ミオ 「・・・でもなんで、そもそも旦那さんいなくなっちゃったんでしょう？」

カオル 「いや、それは・・・」(アカネの方を見る)

アカネ 「・・・」

ミオ (アカネに) 「・・・え、だってカオルさんってすごいキス上手いんですよ？」

アカネ 「は？」

カオル (同時に) 「え、何を言い出すの・・・？」

ミオ 「昨日ね、あの、カオルさん急に私にキスしてきたんですよ」

アカネ 「は、キス？」

カオル (同時に) 「ちよつとやめて」

ミオ 「いいんですいいんです！私今カオルさんの魅力説明しようとしてるんで。あの、私昨日サキさんが言ってたこと完全に理解したんですよ」

アカネ 「え、なに？」

ミオ 「キスして、そのまま相手の一部になってくみたいなこと。カオルさんほんとキス上手いんですよ。私、あーこのままこの人一部になってくんだらうなって本気で思っちゃって」

アカネ 「はあ・・・」

ミオ 「ね、こうゆう感覚ですよね。サキさんが昨日言ってたのって。あんなキスされたら誰だって、この人の魅力の・・・奴隷になっちゃう気がするんですよ・・・」

カオル 「・・・」

ミオ 「ねえ、奴隷に・・・(笑)」

問

カオル 「・・・そんな感覚あの人にあるわけないのよ」

ミオ 「え？」

カオル 「こんなこというのも恥ずかしいんですけどさ。旦那ね、セックスするとき絶対ゴム付けるの。結婚してから一回もナマでしたことなんてないから。私、毎回枕元のゴムの箱見るたびにショック受けるの・・・私ショック受けるために毎回セックスしてたの!」

ミオ 「ああ・・・」

カオル 「私がいくらあの人を自分のものにしたくてもね、あの人には私の一部になりたいとかそーゆーの全くないから!私がキス上手いとか、そんなの一ミリもあの人に関係ないから!」

ミオ 「・・・」

カオル (アカネに嫌味っぽく)「まあ、どっかのキチガイには中出しセックスしてたみたいだけどね!」

アカネ 「え・・・知ってたんですか?」

カオル 「知ってるよ!だから悔しいんじゃない・・・!」

ミオ 「え、中出し・・・」

カオル (ミオに)「処女のアンタにはわかんないことだろうけど!」

アカネ 「は、まだ言ってるんですか。処女なわけないでしょミオちゃんが」

カオル 「処女よ!ファーストキスだってまだなんですよ」

アカネ 「だってミオちゃん、旦那さん・・・」

カオル (アカネを無視してミオに)「あのね、初めてのキスだから勘違いしてるだけだからねアンタ。普通男が女のものになりたいなんて思わないんだから。男女って所詮そんな(もんだから・・・!)」

カオルのセリフを遮るように奥からサキの切羽詰まったような声が、

サキ (声)「ミオちゃんいる!?ちよつと来て!」

ミオ 「え、サキさん!?!」

アカネ (同時に小さく)「サキ・・・?」

サキ (声)「ミオちゃん!早く!」

ミオ 「あ、はい!」

ミオは急いで出て行く。

カオル (急に弱々しく、アカネに近づいて)「・・・アカネちゃん」

アカネ (怪訝に)「なんですか?」

カオル 「・・・ナノちゃんは妊娠してるの?」

アカネ 「知らないですよ」

カオル 「そう。でもいいなあ・・・」

アカネ 「何が？」

カオル 「好きな人が残るわけじゃないお腹に・・・」

アカネ 「だから妊娠してるかとか私知らないんで・・・というか私そんないいもんだと思えないし・・・」

サキが入ってくる。

サキ 「あ、カオルさん！捕まえました！」

カオル 「え？」

サキ 「カズユキさんです！カズユキさん！」

カオル 「は、カズユキさん!？」

サキ 「こっちですこっち！」

そこにタイミングよくナノカも戻って来て・・・

ナノカ 「え、カズユキさん!？」

サキ 「え？あ、はい！今ミオちゃんが・・・」

ナノカ 「どこ!？」

サキ 「縁側の前！こっちです！」

サキはナノカとカオルを連れて出て行く。アカネは一人取り残される。

アカネは大きく深呼吸したあと、自分の太ももを手で触る。そして、見るのを恐れるような様子で、自分の太ももを見ようとすると、自分の太ももを見ようとすると、滑稽な格好になる。

そこに、ミオが戻ってくる。

ミオ 「何やってるんですか・・・？」

アカネ 「あ、いや・・・カズユキさんいたの？」

ミオ 「ええ。サキさんが捕まえて、今3人でなんかやっています」

アカネ 「あ、そう」

ミオ 「アカネさん、あの旦那さんのことそんな興味ないですよね」

アカネ 「そりゃそうでしょ、自分の姉の不倫相手なんてどうだっていいのよ」

ミオ 「そうですか・・・」

間

アカネ 「ねえ、なんでみんな男に振り回されてるんだろ？」

ミオ 「・・・さあ」

アカネ 「私意味わからん。私男嫌いだし」

ミオ 「歴史ですか？」

アカネ 「は？」

ミオ 「女が生きるために男が負けて来た歴史・・・」

アカネ 「・・・勝っても結局残してくのは女の仕事だもん。残るのはいつも男・・・」

間

ミオ 「・・・あの、私妊娠してるんですよ」

アカネ 「え・・・そうなの？」

ミオ 「ええ」

アカネ 「・・・そ、そうなんだ・・・婚約者さんは知ってるの？」

ミオ 「はい、もちろん・・・でも、カオルさんが言ってたことも嘘じゃなくて」

アカネ 「ん？」

ミオ 「・・・処女なんです・・・」

アカネ 「(理解できず)」「ん・・・え・・・？」

ミオ 「・・・この場合って・・・私、何を残してるんですかね・・・？」

アカネ 「え・・・」

サキが入ってくる。だいぶ疲れている・・・

サキ 「あ、ミオちゃんごめんね、さっき」

ミオ 「・・・あ、どうになりました・・・？」

サキ 「二階連れてったよ、2人が」

ミオ 「ああ」

サキ 「カズユキさん暴れるんだけどさ、2人とも鬼みみたいな感じで無理矢理上に連れてくんだから。私笑っちゃったよ・・・」

ミオ 「そうなんですか・・・(笑)」

サキ 「うん、ほんと、ナノちゃんとか何回もカズユキさんの頭(殴ったしき・・・)」

ナノカが戻ってくる。少し後に続いてカオルも戻る。二人とも異常に興奮している。

サキ 「あ、帰って来た」

ナノカ (息が上がっているが、すごい勢い)

サキ 「どうした？カズユキさん・・・」

ナノカ (遮って) 「捕虜にするよ・・・！」

サキ 「捕虜？」

ナノカ 「うん、カズユキさん閉じ込めて来た！二階に。捕虜よ捕虜！」

サキ 「閉じ込めたって、どうやって？」

ナノカ 「突っ張り棒ガチガチにして来たから！あ、だからミオちゃん、部屋使えなくなっちゃった(笑)」

ミオ 「え、私の部屋入れたんですか？」

ナノカ 「しょーがないでしょ。そこしかいい感じのとこなかったんだから」

ミオ 「まあ、そうかもですけど・・・」

ナノカ 「だけどこれであの人も逃げられないから！（ミオに）だから悪いけど、今日
はここで寝てくれる？こたつ」

ミオ 「あ、はい・・・」

問

サキ 「・・・え、カオルさんはそれでいいんですか？」

カオル 「・・・とりあえずはね。仕方ないでしょ」

サキ 「はあ・・・」

カオル 「でもこれはあくまで二人の捕虜だから。それは絶対」

ナノカ 「・・・わかりましたから」

問

カオル (少し泣いていた涙を拭って) 「・・・でも、死んでなくて安心したわ・・・」

問

アカネ (ミオに) 「・・・でもミオちゃん、ここで寝るって大丈夫？床固いしき、お腹
によくはないと思うよ・・・？」

ナノカ 「え、なに？」

アカネ 「いやだって・・・ミオちゃん今妊娠してるって・・・」

音楽が鳴って、暗転。

〈3場〉

翌日夕方。

中央のこたつの上にデイルドが立てて置いてある。

ミオはこたつで、怪訝そうな表情で携帯で何か調べ物しながら、電話をしている。

ミオ 「・・・もしもし？え、私今調べたけど運休なんて出てないんだけど・・・うん、いやちゃんと調べたよ、「こだま」でしょ？・・・17時の、うん4分・・・うん、見てるけど運休とか一つもないんだけど・・・え、お金は別に全然・・・*今そこどこ？駅？静かだけど。駅ってだって・・・ラウンジ？品川でしょ？そんなところあるっけ？・・・へえ、あるんだ。知らなかった、あるんだね。静かなんだねラウンジって・・・え、今コールドブリューって聞こえた！コールド・・・え、スタバ？え、コールドブリュー・・・え、もしもし？ねえ？」(電話が切れる)

*辺りでナノカが入ってくる。ナノカは電話しているミオを少し見た後、こたつの中に手を入れ暖かさを確認し、こたつの中のひねりで、温度をあげる。

ミオ (スマホを放り出して、こたつから足を出して)「熱い・・・なんで温度上げたらんですか？」

ナノカ 「だって・・・妊娠・・・」

ミオ 「え、ウズラだと思ってます？」

ナノカ 「は？」

ミオ 「私ウズラじゃないんで」

ナノカ 「ウズラ？」

ミオ 「ええ。知りませんか？ちっこい鳥」

ナノカ 「いやわかるけど」

ミオ 「だからあったためにもなんもならないんで」

ナノカ 「ああ。でも・・・」

問

ミオ 「・・・ウズラ、私結構好きなんですよ・・・」

ナノカ 「・・・(さっき電話してたのは)旦那さん？」

ミオ 「ああ、婚約者です」

ナノカ 「今日の夜中だよね？到着」

ミオ 「いや、今日来れなくなっちゃったみたいで」

ナノカ 「あ、そうなの」

問

ミオ 「・・・ナノカさんって、カズキさんのこと食べたいとか思ったりとかします？」

ナノカ 「え？」

ミオ 「だって不倫、してるじゃないんですか」

ナノカ 「ああ、わかる？」

ミオ 「アレでわかんない方がヤバイですよ(笑)・・・食べたいですか？」

ナノカ 「・・・一言言ったことあるのよ。セックスした後キスして、あなたのこと食べちゃいたいって・・・そしたら土下座されたよ」

ミオ 「え、なんで？」

ナノカ 「やめてくれーって。頼むから俺を食うとか言わないでくれって」

ミオ 「ああ(笑)」

ナノカ 「その後ね、急に態度変わってさ、女が男を食べるとか意味わかんないとか言われて。俺は女がいなくても生きてけるんだってヒステリックに。それでほっぺ、2回も叩かれた」

ミオ 「うえー(笑)」

ナノカ 「自分勝手よほんと。男なんて女がいないと生きて証拠なんてないようなものなのに」

ミオ 「自分だって、不倫してるのにね」

ナノカ 「でも好きなもんは好きだし、しょーがないんだけどね」

ミオ 「でもまだ食べたい・・・？」

ナノカ 「・・・うん(笑)」

ミオ 「食べないんですか？」

ナノカ 「え？」

ミオ 「だって捕虜でしょう？」

ナノカ 「・・・」

ミオ 「マルコ・ポーロっているじゃないですか、あのジパングとか日本のこと言っていた昔の。あの人ね、ジパングでは捕まえた捕虜を食べる風習があるって本で書いてたんですよ」

ナノカ 「へえ・・・」

ミオ 「人間の肉って他のどの肉よりも美味しいらしくて」

ナノカ 「うん」

ミオ 「だからみんな喜んで食べてたらしいですよ・・・」

問

ミオ 「・・・あ、でも違うのか。なんて言うか、だからそうゆうここは積極的なアレじゃないというか、でも消極的とも違うんでしょうけど・・・だって相手を食べて自分の中に「残す」って、愛のそういう、愛情表現なわけで・・・え、愛って積極的とは違いますもんね、なんか気づいたら好きになってたみたいなのアレもね、ありますもんね」

ナノカ 「はあ・・・」

ミオ 「だから、ある意味食欲ですね。根源的な欲求というか。ほらだって知らない

うちにお腹減ってて何か食べたい（とかもあるわけじゃないですか）」
ナノカ（あえて遮って）「なんか飲み物でも持ってこようか」

ミオ「え・・・あ、いや大丈夫（です・・・）」

ナノカ（立ちながら遮って）「あったかいお茶とか、冷えちゃうと悪いし」

タイミングよくアカネが入ってくる。マグカップを持っている。

ナノカ（アカネに）「あ、なんかあったかいお茶とかいれてきてくんない？」

アカネ「え」

ナノカ「ミオちゃんに」

アカネ「ああ、じゃあコレ」（持っていたマグカップをミオの前に）

ミオ「え？」

アカネ「あ、カモミールなんだけど。いれたけど私なんか飲みたくなっちゃったから」

ナノカ「なんで入れたのよ（笑）」

アカネ（少し刺々しく）「暇だったから。（ミオに）どうぞ」

ミオ「ありがとうございます・・・あ、ちゃんと食べてました？」

アカネ「うん。すごいね、アレ、チャーハン」

ミオ「あ、ピラフですね」

アカネ「ん？」

ミオ「ピラフなんですよ、エビピラフ」

アカネ（白けて）「ああ・・・」

ナノカ「カズユキさん、多分ピラフとか食べるの初めてよ（笑）」

ミオ「ほんとですか（笑）」

ナノカ「私だって今日初めて食べたもん」

ミオ「捕虜になってから、初めてのもの食べるっておかしい・・・（笑）」

ナノカ「ね（笑）」

問

アカネ（ミオに）「・・・ねえ、タバコある？」

ミオ「あ、はい」（ポケットからタバコを出して渡す）

アカネ「火も」（タバコを啜える）

ミオ「ああ」（逆のポケットからライターを出し、つけてあげようとする）

アカネ（ライターを取って）「いいよ自分でするし」（火をつけようとする）

ナノカ（咎めて）「ねえ」

アカネ「・・・」

沈黙。アカネはまだ火をつけていないタバコとライターをテーブルに置く。

アカネ (ディルドを指し) 「ねえ、なんでコレこんなところ立てたんよ」

ミオ 「え？」

アカネ 「返してきなよ、ちゃんと」

ミオ 「いや、神様なんで」

アカネ 「は」

ミオ 「子孫繁栄の神様」

アカネ 「チンコが？」

ミオ 「ええ、チンコに祈るんです。子供ができますようにとか、だから・・・ちゃんと「残せる」ようにって、なんかそーゆーの」

問

アカネ 「・・・バカらし・・・」

ミオ 「なんでですか？」

アカネ 「バカらしいでしょ、チンコが何してくれるんよ」

ミオ 「子孫繁栄してくれるらしいですよ」

アカネ 「バカの宗教でしょ、バカ宗教。女がそんなに祈るとか、男にひれ伏してるのと一緒じゃない」

ミオ 「え、ひれ伏す？」

アカネ 「ええ。それって変でしょ？男を残して、女が男のために生きてることを了承してるようなもんでしょう？」

ミオ 「・・・」

問

アカネ 「・・・まあ、お姉ちゃんは祈っとけば？子孫繁栄」(嫌味っぽく笑う)

ナノカ 「は？」

アカネ 「なんだっけ、拍手して礼？」

ミオ 「あ、2回礼して2回拍手ですね」

アカネ 「ああ」

ミオ 「こーやって(実際にやる)昨日私もサキさんと一緒にやったんで」

アカネ 「は」

ミオ (ナノカに、実際にやりながら) 「礼して、パンパンって(して・・・)」

ナノカ (遮って) 「え、待って。なんでミオちゃんも(そんな・・・)」

アカネ (遮って) 「ちよっと待って。え、サキ、え？」

奥からカオルが入ってきている。

ミオ (気づいて)「あ、カオルさん」

カオル 「あ、どうも・・・」

ナノカとアカネ (振り返る)

カオル 「カズユキさんの様子見にきたんだけど」

ナノカ 「ああ・・・変わりないですよ」

カオル 「そう」

ナノカ 「ピラフも食べたし」

カオル 「ピラフ？」

ナノカ 「ええ」

カオル 「え、ピラフって何？」

ナノカ (ミオに)「あ、ピラフって何？」

ミオ 「あ、えっと、チャーハンって、あの、ご飯と具材一緒にフライパンで炒めるじゃないですか」

カオル 「うん」

ミオ 「ピラフはそうじゃなくて、なんて言うんだろ、あの、先に具材だけ炒めるんですね。それでご飯と一緒に具材を炊飯器に入れて(それで炊くんです)」「(遮って)」「まあいいや。トイレとかどうしてるの?」

ナノカ 「え?・・・ああ。バケツに」

カオル 「は、バケツ!？」

ナノカ 「おっきいバケツ置いてあるんで、それにしてもらってます」

カオル 「はあ・・・破られたりしてない?」

ナノカ 「そんな度胸ないでしょあの男(笑)」

カオル 「そうね、そんな度胸ないか(笑)」

問

カオル 「・・・じゃあとりあえず私見てくるから」

ナノカ 「気をつけてくださいね絶対」

カオル 「え?」

ナノカ 「や、逃げたりしたら最悪なんで」

カオル 「ああ大丈夫よ」

ナノカ 「私も行きます」

カオル 「は、いいよ」

ナノカ (少し攻撃的に)「いや私別にカオルさんのこと信用してるわけじゃないから」
カオル 「・・・あ、そう?・・・じゃあいいけど」

ナノカ 「はい」

カオルとナノカは出ていく。沈黙。

アカネ 「・・・え、サキが祈ってたの？」

ミオ 「あ、はい」

アカネ 「こんなのに・・・？」

ミオ 「そうですよ、一緒に」

間

ミオ 「そういえば、納屋ってなんだったんですか？」

アカネ 「ん・・・ああ、別にいいのよ」

ミオ 「ん？」

アカネ 「いやだから、あなたが気にするようなことじゃないって」

ミオ 「はあ・・・」

アカネ 「どうせ婚約者さん来たら関係なくなるわけだからこの家とは。あなたが土足で踏み込むようなアレじゃない」

ミオ 「そんな私踏み込んでます？」

アカネ 「うん、だいぶ」

間

ミオ 「・・・あの人、来ない気がするんですよ・・・」

アカネ 「え？」

ミオ 「私の婚約者。私のこと、迎え来ない気がするんですよ。今日も新幹線止まって来れないとかいうし。(スマホを見せて) ほら、どこも止まってない」

アカネ 「え、見せられてもよくわかんないけど・・・」

ミオ 「私が気持ち悪いからですかね？」

アカネ 「は？」

ミオ 「だって、セックスしてないのに子供できるとか普通に变だし。変態ですよね私。だから多分、もう多分彼、私に会いたくないんだと思うんです」

アカネ 「え・・・そうゆう話したの？」

ミオ 「しないでですよ、彼優しいんで」

アカネ 「はあ・・・ごめん、でもやっぱ变だわ。ミオちゃん知らない間に、なんかそうゆうことしてたとか(ないんだよね)」

ミオ (遮って) 「してないです。彼してくれないんです。でも私はずっと彼のために誘ったりしてましたから！」

アカネ 「そう・・・」

ミオ 「誘うっていつても、いい感じのブラジャーつけるとかそんなありきたりなやつですけど、でもずっと断られてきたんで・・・赤いブラジャー・・・」

アカネ 「・・・」

ミオ 「・・・赤いブラジャー！」

アカネ 「・・・そう」

ミオ 「・・・でもそしたら知らないうちに子供できてて、できちゃって・・・」

アカネ 「うん・・・」

ミオ 「彼、一緒に育てたいって言ったんですよ！それで育てるなら田舎で伸び伸び育てたいって彼が言うから、こーやって来たのに・・・こーやって・・・」(泣きながら、デイルドの電源をつける)

アカネ 「・・・そうだったんだ」

ブーという音が響く。ミオはアカネから目を逸らす。少ししてアカネは電源を切る。

ミオ 「ちょっと、なんで止めちゃうんですか！」

アカネ (ミオの予想外の強い反応に驚き) 「え・・・あ、ごめん」

ミオ (自分でも自分の反応に驚き) 「あ、いやごめんなさい・・・」

アカネ 「はあ・・・」

間

アカネ 「・・・あのね、お父さんの血なの」

ミオ 「・・・へ？」

アカネ 「納屋、あなたが気になってる・・・お母さんがね、お父さんのこと食べちゃったのよ・・・」

ミオ 「え、お母さんが・・・え、は・・・？」

アカネ 「お父さんはね、まあもう歳だったから。あんまりお母さんに愛情とかなかったんよね。ずっと自分の部屋とか籠ってたし。ご飯の時くらいしか出てこないの。でもお母さんはずっとお父さんのこと大好きだったんだの」

ミオ 「・・・はい・・・」

アカネ 「それで、3ヶ月前にお母さん、納屋でお父さんのことスコップで殺しちゃったの・・・」

ミオ 「・・・そ、それで食べちゃったんですか？」

アカネ 「そうよ」

間

ミオ 「・・・あ、それでお母さん妊娠とか・・・」

アカネ 「妊娠？」

ミオ 「お母さん、なんかそんなこと言ってて」

アカネ 「は、自分が？」

ミオ 「ええ」

アカネ 「や、そんな・・え、本当？」

ミオ 「はい、ナノカさんは嘘だと言ってましたけど・・え、でもすごいですね、
とんでもない愛ですね・・」

アカネ 「・・・」

アカネ、大きくため息をつく。

アカネ 「いや、どうせ嘘だと思うけどね。お父さん食べてから頭おかしくなってるも
んアイツ」

ミオ 「はあ・・」

アカネ 「頭おかしいんよ。(デイルドを指して) こんなん渡してくるぐらいでしょ」

ミオ 「・・・」

アカネ 「意味わからんよね。お母さんもあの二人も、頭おかしい・・」

ミオ 「ナノカさん達ですか？」

アカネ 「当たり前じゃない。みんなさ、男を食べるから女の方が上だと思ってるじゃ
んか・・捕虜とか、わけわかんないこと言って」

ミオ 「ええ・・」

アカネ 「みんなわかってないから。男がいないと生きられなくなっちゃてるのに。愛
されたくて必死になってんのわかってないの」

ミオ 「・・・」

アカネ 「ねえ、そうじゃない？男いないと満たされないとかほんと・・でもね、ほん
とに気付いてないのかはちょっとアレなの。お姉ちゃんの手首見たことある？」

ミオ 「手首？」

アカネ 「うん、リストカット。あの人ね、夜とかキッチンで自分の手首、包丁で切っ
たりしてるんだから・・だから自分でも自覚してると思うの。そーやって、男
の上に立ってるつもりで、ゆっくり自分が自殺に進んで、うんそうよ自殺！ア
イツらやってること全部自(殺してる・・)」

ミオ (遮って)「もうやだ！」(手元のティッシュの箱を投げる)

問

ミオ 「え、なんかやだ！え、なんでそんな自殺とか。え、だってそれがこの田舎の
愛なんでしょ！？」

アカネ 「・・・そうよ」

ミオ 「え、だってそれにだよ。それにアカネさんだってサキさんがいるじゃないですか。サキさんのこと食べたいと思うで（しょ・・）」

アカネ （遮って）「思わない！」

ミオ 「え」

アカネ 「全く思わない！」

間

アカネ 「・・・私の太もも見る？」

ミオ 「は・・・？」

アカネ （ミオに迫り）「太もも見ろ！太もも！」

アカネは自分のワンピースの中にミオを無理矢理入れようとする。ミオは「やめて！」とか言いながら抵抗して、目をつぶっている。

アカネ 「目開けて！」

ミオ 「やだ！」

アカネ 「ちゃんと見てって！」

二人は無様な揉み合いをした後、アカネはミオに自分のスカートの中を見せる。少しして、ミオはアカネを突き飛ばす。

アカネ （息が上がっているが）「・・・ちゃんと見た？」

ミオ 「・・・は・・・え、噛みちぎられてる・・・？」

アカネ 「・・・そうよ」

ミオ 「サキさんが・・・？」

アカネ 「うん・・・」

ミオ 「・・・生ぬるいですね・・・」

アカネ 「は？」

ミオ 「え、生ぬるいです！超しょーもないです！」

アカネ 「どうゆうこと？」

ミオ 「じゃあキスしましょうか？そんな言うなら、じゃあ、食べられちゃいたいってことですよ？好きな人にずーっと残されてたいってことですよ？私からしたらそっちの方が自殺ですよ！」

アカネ 「え」

ミオ 「あ、だからアカネさんは奴隷になりたいんですね！いいですよ。そんなしょーもないのじゃなくて、私ちゃんとキスしますから！」（アカネに迫る）

アカネ 「やめて！」
ミオ 「だってそうでしょ！」

ミオがアカネにキスをしようとし、それに抵抗するアカネ。
サキが入ってくる・・・

2人はそれに気付かず、攻防を続ける。そしてついにミオはアカネに長いキスをする。

ミオ (顔を離して) 「・・・ね、わかりました？」

アカネ 「・・・」

ミオ 「だから残されたいなんて嘘なんですよ。今抵抗したじゃないですか。私ココ来てわかったの、女っていうのは結局そーやって、相手を食べて、自分の中に残していききたい生き(物)なんだから・・・」

サキ (遮って) 「え、何やってるの!？」

2人 「!？」

サキ 「なんで二人がキスしてるの!？」

アカネ 「サキ・・・え、なん(で・・・?)」

サキ 「いや・・・」

間

ミオ 「・・・教えてたんですよ」

サキ 「え？」

ミオ 「アカネさん、自分が残されるんだったら、他の人に残されたいとかいうんです」

サキ 「え、それでなんでキスって・・・」

ミオ (遮って) 「だから、女の本能をわからせてあげてたんですね・・・女が男を食べてきたっていう愛の歴史ですか？私ここ来てまだそんな経ってないですけど、私たちって好きな人を「残す」ことで快感を覚える人種なんだって、すごいわかったんで。そーやって好きな人を一生奴隷みたいに自分の(体)の中で・・・」

サキ (遮って) 「だからなんであなたがキスしてたのかって!」

ミオ 「サキさんが生ぬるいからですよ!」

サキ 「は」

ミオ 「だから生ぬるすぎるんですよ愛が!ぬるま湯なんですよ!」

サキ 「何が？」

ミオ 「っていうかぬるま湯どころじゃないですね!もう水風呂ですよ水風呂!」

サキ (アカネに) 「ねえ、何言ってるの?」

ミオ 「だから、アカネさんはわかんないじゃないでしょ？食われることの恐怖。それで理解しないと、自分は、いや女は、残す側の勝者だって！」

問

サキ 「・・・それで・・・？」

ミオ 「だから私はアカネさんが覚醒するためのね、そうゆう・・・」

サキ (遮って)「や、だからミオちゃんがキスしてるってゆうのが・・・」

ミオ (遮って)「え、まだわかんないんですか？バカなんですか？そんなんだから二人はそーやって水風呂みたいな愛情ごっこなんですよ。しょーもない・・・愛ってゆうのはもつと暴力的な、こう、グロテスクなものですから！」

サキ 「え、わかんないわかんない、なに暴力・・・？」

ミオ 「じゃあいいです！・・・でも婚約者到着したら食べちゃった方がいいって言ったのあなたですからね？そーやって、私この歴史を理解してきたけど、でもいいです。そーやってずっとわかんないで水風呂やってれば！」

サキ 「は・・・」

アカネ (同時に)「・・・サキはわかるはずでしょ・・・」

ミオ (アカネの方を振り返って)「え？」

アカネ 「・・・だって犯人サキだもん・・・」

問

ミオ 「・・・え、犯人？」

アカネ 「こないだの死体の犯人」

ミオ 「は、え、どうゆう・・・」

アカネ 「・・・ミオちゃんが見つけた死体、齒形ついてたでしょ。それ食べたのサキだから」

ミオ 「え、そうなん(ですか・・・?)」

サキ (遮って)「え、違う。何アカネ。昨日も言ったけど私関係ないから」

アカネ 「もうわかってるから・・・」

サキ 「え、なんで私が大体、男を食べなきゃいけないのよ」

アカネ 「じゃあ見せてよ」

サキ 「は」

アカネ 「口ん中見せて」

サキ 「え、やだ・・・」

アカネ (ミオに)「口ん中見せてもらってよ」

ミオ 「でも・・・」

アカネ 「だって犯人よ。関係ないなら証明してもらわんと」

ミオ 「まあ・・・」

アカネ (サキに)「だから証明して」
サキ (後ろに下がろうとする)

アカネはサキに飛びかかり、揉み合ってから羽交い締めにする。

アカネ 「ミオちゃん見て！」

ミオ 「あっはい！」

サキ (振り解こうとして)「やめて！」

アカネ 「動くな！」

ミオ (サキの顔を掴み、口を開こうとする)

サキ 「離して！」

3人は大きな声で叫びながら暴力的で無様な揉みあって転げ回る。「少しして、サキが抵抗した肘の顔に当たり、アカネはその場に倒れ込む。ミオもそれでサキから手を離す。

沈黙

ナノカが入ってきている。

サキ (我に返って)「あ・・・ごめん・・・」

アカネ 「・・・」

サキ 「ごめん・・・」(逃げるように出て行こうとするが、そこにはナノカがいる)

ナノカ 「え、なに・・・？」

サキ 「ごめんなさいちょっと」(ナノカをどけて出て行こうとする)

アカネ 「お姉ちゃん捕まえて！」

ナノカ 「え！？」(訳もわからずサキの手を掴む)

サキ 「離して！」

アカネ 「そのままそのまま！ミオちゃんも！」

ミオ 「あっ」(サキを食い止めるため、ナノカに加勢する)

逃げようとするサキの手をナノカとミオが引っ張る形。
つまずいたサキに、アカネは馬乗りになる。

アカネ 「口ん中見るよ！」

ミオ 「あ、はい！」

アカネとミオでサキの口を開けさせようとするが、サキは抵抗する。カオルが入ってくる。

アカネ 「お姉ちゃんも！あ、カオルさん！」

カオル 「え、なに！？」

アカネ 「手伝って！口の中見るの！」

カオル 「どうゆうこと・・・？」

アカネ 「いいから！」

オロオロとアカネらの揉み合いの方へ近づいていくナノカとカオル。ナノカは少しだけ加勢する。

やっと、サキの口が開く。閉じないように抑えながら、それを4人は覗き込むように見つめる。

沈黙。

ミオ 「・・・ほんとだ、尖ってるわ・・・」

アカネ 「・・・」

ミオ 「犬歯が・・・ほんとに・・・」

間

サキ (アカネとミオを振り払って)「・・・もういいでしょ」(部屋の隅へ)

ミオ (サキに)「サキさんが食べたんですか？」

サキ 「・・・」

ナノカ 「え、何を？」

ミオ 「あの死体・・・」

カオル 「は、死体ってあの？」

ミオ 「あの？」

カオル 「アカネちゃんのストーカー・・・？」

ミオ 「ええ。歯が尖ってるからって」

カオル 「は、意味わかんない。なんで食べたの？」

ミオ 「それはわかんないですけど」

カオル 「あ、だから昨日歯がなんかどうこうって私に・・・？」(アカネの方を見る)

アカネ 「はい、すみませんでした昨日は・・・」

カオル (サキに)「え、サキちゃん食べたの？なんで！？」

サキ 「・・・」

ミオ (カオルが普通の様子じゃないので)「え、どうしたんですか？」

カオル 「なんでもないけど」

ミオ 「え、だって明らかに様子が(変・・)」

カオル (遮って)「なんでもないから」

ミオ 「でもだってなんか・・(アカネに) ねえ？」

アカネ 「え、私？」

ミオ 「え、だっておかしくないですか？」

ナノカ (横から)「だってそりゃ犯人だからでしょ」

ミオ 「!？」

ナノカ 「ごめんなさい言っちゃいますけど。アレじゃないですか。二人で殺したって聞いたんで私」

ミオ 「え、二人って・・？」

ナノカ 「サキちゃんとカオルさん。二人で殺したって私聞いたからさ・・」

問

カオル (誤魔化すように)「は、どーゆーこと・・？(笑)」

ミオ (遮って)「は・・え、どうゆうことですか・・？」

ナノカ 「・・だからそーゆーことよ」

ミオ (カオルに)「え、そうなんですか・・？」

カオル 「・・」

ナノカ 「カオルさん。もう、みんな知っちゃったわけだしさ、言っちゃっていいと思いますよ(笑)」

カオル 「・・あんたが言ったんでしょ」

ナノカ 「まあ(笑)」

ミオ (サキを見て)「じゃあ二人で食べたってゆう、そーゆーこと(ですか?)・・」

カオル (遮って)「いや違う!食べたとかは知らない私」

ミオ 「はあ・・」(サキの方をチラッと見る)

カオル 「私は知らない、ただ・・だから、殺すの手伝っただけだから・・それに私、アイツ殺したところは見てないし・・」

ミオ 「え？」

カオル (少し恥ずかしそうに)「怖くなって私逃げちゃったのよ・・」

問

アカネ (横から)「え、なんですか？」

カオル 「え？」

アカネ 「カオルさんあの人殺す理由なくないですか・・？」

カオル (限りなく小さな声で)「・・予行練習」

アカネ 「ん？」

カオル 「カズユキさんの予行練習・・・」

沈黙。

ミオ 「予行練習・・・ですか・・・？」

カオル (吹っ切れて) 「ええそうよ！私カズユキさんのこと殺そうと思ってたの。この人(ナノカ)と何回もやってること知ってたからね。そしたらサキちゃんがアイツ殺したいって言うから、ちょっと手伝った(だけだから・・・)」

ナノカ 「え、そんなこと考えてたんですか!？」

カオル 「うん、あんたに取られるくらいなら(殺しちゃった方が・・・)」

ナノカ (遮って) 「なにその独り占め!」

カオル 「は？」

ナノカ 「カズユキさんのこと独り占めしようとしてたってことですよね、それって」

カオル 「独り占めって何？」

ナノカ 「それはズルくないですか!」

カオル 「それはそうでしょだって。私はあの人を愛してるんだから!」

ナノカ 「私だって愛してます!」

カオル 「私の方が愛してるから!」

問

カオル 「大体あんたは・・・」

ナノカ (同時に、とんでもなく大きな声で) 「じゃあわかりました!」

他 「!？」

ナノカ 「半分こしましょう!」

カオル 「ん？」

ナノカ 「カズユキさんの右側は私、左側はカオルさん。これでどうですか？」

カオル 「・・・二人で食べるってこと？」

ナノカ 「そうです!それなら平等ですから!」

問

ミオ 「・・・確かにそれならいいかもですね・・・」

ナノカ 「ね、そうでしょ」

カオル 「ダメよ」

ナノカ 「え？」

カオル 「そんなの全然平等じゃない」

ナノカ 「どこですか？」

カオル (言いたくなさそうに) 「いや・・・」

ナノカ 「え、何？」

問

ミオ 「あ、お腹・・・？」

ナノカ 「ん？」

ミオ (カオルに) 「お腹のことですか？」

カオル 「そうよ・・・」

ナノカ 「あー、それですか」

カオル 「え？」

ナノカ (ポケットから妊娠検査薬を出して) 「コレ・・・」

カオルはそれを奪い、ミオは覗き込む。アカネも遠目からそれを見る。

カオル 「え・・・線、ない・・・」

ミオとアカネ 「え？」

ナノカ 「・・・そうです」

カオル 「妊娠、してないの？」

ナノカ 「してないですから・・・」

アカネ 「は、そうなの」

カオル 「そう・・・(しみじみと) よかった・・・」(テーブルの上に置く)

ナノカ 「・・・」

カオル (特に意味はないがミオに) 「・・・よかった・・・」

ミオ (愛想笑い)

カオル (ゆっくりナノカの方を向いて) 「・・・よかった・・・」

ナノカ 「・・・よくはないですけどね・・・」

問

カオル 「・・・じゃあそうしよっか・・・」

ナノカ 「・・・半分ですか？」

カオル 「うん・・・明日決行でいいよね？」

ナノカ 「・・・んー・・・今日でいいんじゃないですか？」

カオル 「そうね。今日にしよ・・・」

問

ミオ 「・・・あの」

カオル 「ん？」

ミオ 「私見学したいです・・・」

カオル 「え・・・？」

ミオ 「カズユキさんが二人のモノになる瞬間、見たいんですけど・・・」
カオル 「ああ・・・別にそんないいもんじゃないと思うよ」
ミオ 「なんなら手伝わせてくださいよ」
カオル 「は・・・いやいいよ」
ミオ 「や、私も予行練習しときたいかもなんで・・・」
カオル (意味がわからず) 「ん・・・？」

サキが立って廊下の方へ歩いて行こうとする。

アカネ 「ねえ、サキ・・・」

サキ 「・・・なに？」

アカネ 「・・・なんで食べたの？」

サキ 「いいでしょそんなこと」

アカネ 「よくないよ・・・」

サキ (出て行こうとする)

アカネ 「よくないよ！」

サキ (無視)

カオル 「あ、でも私もそれ知りたい」

サキ (足を止めて) 「は？」

カオル 「だってあなた、アカネちゃん守るために殺すんだって言ってたじゃない」

サキ 「ええ・・・」

カオル 「言ってたよね？え、じゃあなんで食べたの？殺すだけでよかったでしょ？」

サキ 「・・・」

カオル 「じゃあアカネちゃんのためって嘘だったってこと？」

サキ (強く反応して) 「嘘じゃない！全く嘘じゃないから！」

カオル 「え、なんで怒るの!？」

サキ 「嘘じゃないから！」

カオル (ナノカに) 「いや怒るの(おかしくない!?)」

アカネ (カオルを遮って) 「ちょっと黙ってください!!」

問

アカネ 「・・・え、え、サキは男とそうゆうことしたかったってこと？」

サキ 「・・・」

アカネ 「・・・え、もしかしてしたの・・・？」

サキ 「・・・」

アカネ 「そうゆうことなの？あんなに男嫌いって言ってたのに。結局男を自分のモノ

にしたいって思ったってことだよな?・・・だから、男を自分の中に残したいって思ったんよね?」

サキ 「そうじゃない・・・」

アカネ 「そうでしょ!それで私にそんなことを隠しててさ・・・」

サキ 「隠そうとなんかしてない!」

アカネ 「してた!」

サキ 「そうじゃない・・・私、ほんとは今日ちゃんとそれ全部話そうと思ってたの!」

アカネ 「それを信じているの?」

サキ 「・・・なのにさ、キスしてるしさ、なんかミオちゃん意味わかんないこと言ってるしさ・・・」

ミオ 「え・・・」

サキ 「それに妊娠がどうかさ、ほんと意味わかんない話になるし・・・」(妊娠検査薬を手取る)

問

サキ (徐に妊娠検査薬をアカネに投げつける)

アカネ 「キャッ・・・!」

ミオ 「え、ちよっ・・・」(止めにサキの方へ)

サキ (ミオを突き飛ばす)

カオル 「ちよっと!」(サキを止めに、サキを掴む)

サキはデイルドを手に持ち「もう意味わかんないの!」「もうやだ!」などと泣きながら連呼しながら暴れる。ナノカとカオルとミオはそれを止めようとする。4人が団子状態で大声で叫ぶ揉み合い。

やがて、3人でサキと押さえつけ、揉み合いは収まる・・・

沈黙。

ミオ 「・・・なんなんですか!?!」

みんな息が上がっている。サキを抑える力が弱まる。

サキ (泣きじゃくりながら)「・・・私、妊娠できない体なの!!」

他 「!?!」

サキ (他を振り払うように座る)「・・・だから生理も今まで一回も来てない。ってゆうか来ない!だから、妊娠とかできないのよ私!」

ミオ 「・・・どうゆうことですか?」

サキ 「だから生まれつき妊娠できないの！生まれた時から・私、膣がないから・・
そうゆう病気・・そうゆう体なの・・！」

間

ミオ 「・・・え、それで食べたってことですか？」

サキ 「・・・そうよ」

ミオ 「そうですか・・・」

間

アカネ 「・・・なんで？」

サキ 「なんでって」

アカネ 「妊娠できなくなっちゃっていいじゃん。その何がダメなのかわかんない」

サキ 「ダメだよ！」

アカネ 「は？」

サキ 「それが女でしょ！？そうやって誰かを自分の中に残して生きていくのが女で
しょう？そうやってみんな生きてんだよ、この田舎は・・・」

アカネ 「・・・だからって・・・」

サキ (遮って) 「じゃあ何、私一人で死んでいけってこと？そんなの私耐え(られな
い・・・)」

アカネ (遮って) 「私は！？」

サキ 「・・・え？」

アカネ 「私を食べるんじゃダメなの！？」

サキ 「・・・」

アカネ 「・・・私、サキにだったら食べられてもいいよ全部・・・別に足だけじゃなくて
もいい。殺してもいい・・・その何がダメ・・・？」

サキ 「・・・ダメだよ・・・」

アカネ 「なんで・・・？」

サキ 「女だから」

アカネ 「なんで？なんで女じゃダメなの？私じゃダメなの・・・？」

サキ 「・・・だって、好きだからだよ」

アカネ 「・・・え？」

サキ 「生きてて欲しいって思っちゃうもん・・・だからさ、男じゃなきゃダメなの絶
対・・・」

アカネ 「・・・」

サキ 「そうゆう歴史なんだから、ここは・・・」

間

サキ 「これでいい・・・？」

アカネ 「・・・」

サキ 「・・・だから、男でもなんでも食べてみたいって思ったのよ」

カオル 「無差別だったってこと？」

サキ 「無差別ですね、誰でもよかったんですから・・・」

カオル 「ああ・・・そう・・・」

間

サキ (出て行こうとする)

ミオ (サキの手を掴んで) 「・・・ちょっと待って!」

サキ (振り払って) 「何よもう・・・」

間

ミオ 「・・・私妊娠してるんですよ」

サキ 「・・・らしいね」

ミオ 「はい」

サキ 「・・・それで？」

ミオ 「でも・・・処女なんです」

サキ 「は？」

カオル (同時に) 「え、どうゆうこと？」

ミオ 「・・・誰ともセックスしたことないし、婚約者とも。それに誰のことも食べたことないです」

サキ 「・・・はあ」

ミオ 「・・・コレって私の中に何がいますか？」

沈黙。

ミオ 「・・・なんなんですかね？何が生まれてくるんですか？」

他 「・・・」

ミオ 「もしかして何も生まれてこない・・・？なんもない、だから空っぽなんですかね・・・？」

間

ミオ 「少なくとも私には何もないんですよ・・・」

間

ナノカ (呟くように) 「・・・マリアじゃん」

ミオ 「え？」

ナノカ 「聖母マリア・・・」

間

ミオ 「・・・神様でもいるんですか？ここに」（お腹を指す）
ナノカ 「うん」

ミオ 「そう、神様・・・」

問

ナノカ 「とりあえず、コレ」（羽織っていたカーディガンを渡す）
ミオ 「ありがとうございます」（羽織る）

沈黙。

サキ 「・・・でも私はあなたとは違うから」

ミオ 「え？」

サキ 「・・・私は聖母でもなんでもない、こここの、普通の女だから・・・」

アカネ （徐にサキに近づき、服を脱ぎ始める）

サキ 「（引いて）は、なに!？」

アカネ （サキの手を払って脱ごうとし）「ねえ、食べて・・・」

サキ 「え、は、やめて!」

アカネ （サキに抱きついて、泣きながら）「食べてよお・・・」

サキ 「いいから!」（逃れようとする）

アカネ 「お願いだから、お願いだから食べてよおお!」（また掴む）

サキ 「やめてよほんと!」（アカネを振り解く）

アカネ （それでも）「ねえ、お願いだよお・・・!」

サキ 「・・・ヤダって!」

問

サキ 「・・・」（逃げるようにかけて出ていく）

アカネ 「ねえ、食べてよサキ・・・」（サキを掴もうとするが）

サキ （アカネの手を払って出ていく）

アカネ （廊下の方へ向かって）「ねえ!食べてよお!ねえ・・・!」

沈黙。

カオル （ミオに）「・・・本当に妊娠してるの?」

ミオ 「ええ・・・」

カオル 「一応検査してきたら?してるんだらうけど、こーゆーの・・・」（落ちている

検査薬を拾う）

ナノカ 「それ、おしっこかけてますけど（笑）」

カオル 「うわ、そうじゃん」(検査薬を投げるように部屋の隅へ)

問

ミオ (ディルドを拾いテーブルの上に立てて) 「私、マリアなんですか？」

ナノカ 「は」

ミオ 「え」

ナノカ 「知らないよ(笑) テキトー言ったただけだから」

ミオ (お腹に触れて) 「そしたら神様だ・・(笑)」

ナノカ 「テキトーだって(笑)」

カオル (ディルドを指して) 「祈れば？」

ミオ 「え？」

カオル 「安産祈願、でしょ？」

ミオ 「ああ」

カオル 「私は全然信じてないけどね。私はだって、だからこの田舎で生まれて、育て、その、生活してるとってゆうさうゆう人間だから」

沈黙。ミオは祈ろうかドギマギするが祈らない。そして、ミオはポケットからハンドタオルを出し、アカネに渡す。アカネが取らないのでテーブルの上に置く。アカネは少ししてハンドタオルを掴み、涙を拭く。そして、そのまま鼻をかもうとするので・・

ミオ 「あ」

ナノカ 「ああ」(近くにあったボックスティッシュをアカネに渡す)

アカネ (ハンドタオルをテーブルの上に置き、ティッシュを3枚ほど乱雑に出して鼻をかむ)

問

ナノカ (ミオに) 「優しいじゃん」

ミオ 「え」

ナノカ 「やっぱ神なんじゃないの？」

ミオ 「いやそんなアレは、アレですけど」

ナノカ 「神の施しでしょう？隣人を愛せよだ(笑)」

ミオ 「そんな自覚ないんで(笑)」

ナノカ 「自覚なんてないもんでしょ。でも今のが最初の神のワザだから。最初からポツケ、ハンカチなんて入ってた？」

ミオ 「入ってましたよ(笑) てかほんとに神なのかもわからない」

問

ナノカ 「・・・私だって自覚とかないから。男を食べたいとか別に、知らない間にそーゆー感覚ってお腹の方からジトーって生まれてきたし」

ミオ 「食欲ですね」

ナノカ 「・・・ある意味そう（笑）」

カオル （立って）「私カズユキさん見てくる」

ナノカ 「ああ」（立とうとする）

カオル 「いや、最後のアレだからさ。一人で行かせてよ」

ナノカ 「・・・そうですね」

カオルは出ていく。

ナノカ （デイルドを指して）「・・・なんでこんなのお母さん持ってたんだろ」

ミオ 「寂しかったんじゃないかって、カオルさんが」

ナノカ 「そっか」

ナノカは電源をつける。ブーっという音が部屋に響く。

ナノカ 「気色悪い動き（笑）」

ミオ 「ですね」

ナノカ 「男のチンコってだって、こんな動きはしないよ」

ミオ 「そうなんですか、私見たことないし」

ナノカ 「アレだね、多分普通のじゃ満足できなくなるんだらうね。だから、こんなが開発されるんでしょ多分」

ミオ 「それで食べるんですか？」

ナノカ 「んーかもしれない」

ミオ 「ああ」

ナノカ 「もう知らん！なんも知らんよー！（笑）」

間

ナノカ 「・・・ちょっとトイレ行ってるわ」

ミオ 「あ、行ってらっしゃい」

ナノカ出ていく。

ミオとアカネだけが取り残される。部屋にはデイルドの音が響く。

ミオはアカネの方をチラチラ気にしているが特に何もできない。

そして自分のお腹をじっと見つめたあと、デイルドの電源を静かに切り、部屋の隅に雑

に投げた・・・
しばらくして、2階からカオルの甲高い叫び声が聞こえる。ミオとアカネはビクツとして、上を見上げる・・・そして、ミオはデイルドに視線を移し、冷ややかな視線で見つめる。

血相を変えたのカオルが入ってくる。

カオル 「ナノちゃん！ナノちゃん！・・・え、アレ、いない・・・」

ミオ 「あ、今トイレに・・・」

カオル 「・・・ああ・・・」

カオルは全身の力が抜けたようにその場に倒れる。

ミオ 「え、カオルさん!？」(駆け寄る)

カオル 「・・・」(荒い呼吸をしている)

ミオ 「大丈夫ですか!？」

カオル (過呼吸気味になっている)

ミオ 「え、どうしました!？え、えっと・・・え、どうしよう・・・」(アカネの方を見る)

アカネ 「・・・」(ミオから視線を逸らす)

ミオ 「あ、えっと・・・(カオルの背中をさすって) ゆっくり。ゆっくり、吸って、吐いて。あ、そうです。吸って、吐いて・・・大丈夫ですか。あ、ゆっくりで・・・吸って吐いて、吸って・・・」

カオルは徐々に落ち着いてくる。ミオはカオルをさすり続ける。

カオル (弱々しく何言ってるかわからないが) 「・・・んが・・・」

ミオ 「え、なんですか?」

カオル 「・・・さん・・・」

ミオ 「ごめんなさい、聞こえないです」

カオル 「・・・カズユキさんが・・・」

ミオ 「あ、カズユキさん・・・え、どうかしたんですか?」

カオル 「・・・食べられちゃった・・・」

ミオとアカネ 「!？」

間

ミオ 「・・・食べられた・・・？」

カオル 「・・・お母さんが・・・」

ミオ 「お母さん!？」

カオル 「・・・お母さんが食べてたの・・・カズユキさんの喉元・・・」(また過呼吸気味になる)

ミオ 「え、ほんと・・・あ、ダメです!落ち着いてください・・・(またさすって)吸って、吐いて、吸って、吐いて・・・」

カオル (徐々に再度落ち着いてくる)

ミオ 「・・・え、お母さんが食べてたんですか？」

カオル (弱々しく)「・・・ええ」

ミオ 「なんで・・・？」

問

カオル 「・・・多分それ返さなかったから・・・」

ミオ 「え」

カオル 「それ・・・」(弱々しくディルドを指さす)

ミオ 「は・・・え・・・」

沈黙。ミオはディルドを拾う。

ミオ 「・・・え、コレのせいで・・・？」

カオル 「・・・」

ミオ 「コレのせいで・・・？」

問

ミオ 「・・・返し行かなきゃ・・・」(出て行こうとして)

カオル 「待って・・・」

ミオ 「・・・え、でもカズユキさんが・・・」

カオル 「・・・それ、貸して・・・」

ミオ 「コレですか・・・？」

ミオはドギマギしながら、ディルドをカオルに手渡そうとする。

カオルはその手を掴んで、ミオの腕にキスをする。

ミオ 「え・・・」

カオル (ミオの腕を引っ張り、袖をあげ、二の腕を舐める)

ミオ (特に抵抗もしないが)「ちよっと・・・」

カオル (そのまま、腕の上の方まで舐めていく)

ミオ 「早くしないと、カズユキさん・・・」

カオル 「いいの。あの人はもうどうせ助からないから・・・」

問

カオル 「・・・私ね、カズユキさんが血だらけでお母さんに食べられてるところ見たのにさ、なんでかわかんないけど、無性にお腹が減ってくるのよ」

ミオ 「・・・はあ・・・」

カオル 「ええ・・・変な話だと思うけどすごく食欲がね、湧いてくるのよ・・・」

ミオ 「そうですか・・・」

カオル 「神様なんでしょ？腕の一本くらい・・・ね？」

カオルが再度二の腕に噛みつこうとした時、ミオはその顔を掴み、そのまま深いキスをする。アカネはそれを凝視している。

ミオはそのままカオルを押し倒す。

カオル 「ちよっと・・・」

ミオ (遮るように再び深いキスをし、そのままカオルの首筋に噛み付く)

カオル 「痛い・・・」

ミオ 「我慢してくださいよ・・・(笑)」

その時、2階からナノカの甲高い叫び声が聞こえる。

3人がビクっとして上を向く。

アカネは姉の元へ、早足で出ていく・・・

ミオはまだ上を気にしているカオルに再度深いキスをする。

続けて、カオルの服の中などにも手を入れ弄り始めるが、近くにあったデイルドに気が付き、それを手に持つ。

ミオが電源をつけた瞬間・・・

カオル (払って) 「いや・・・!」

ミオ 「え・・・」(思わずデイルドを投げてしまう)

ミオの手から飛ばされたデイルドは、畳の上でデイルドが音を立てながら動いている。それはまるでのたうち回る動物のよう・・・

それを二人で見つめる。

ミオ 「・・・のたうち回ってるわ・・・(笑)」

カオル 「・・・変な動き・・・(笑)」

ミオ 「ほんとに(笑)」

カオル 「ね(笑)」

二人で顔を見合わせて笑う・・・

暗転。完。